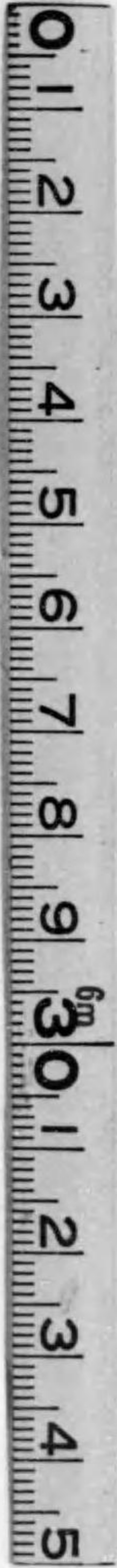


始



14.21

289

大正十二年十二月

大正十一年度業務報告

富山縣立農事試驗場

1421-289

緒言

本報は大正十一年度に於て施行したる業務の報告を主とし大正十年度冬作の試験成績を併せ掲記したるものなり

大正十二年十一月

大正
12.12.28
内交

富山縣立農事試験場

大正十一年十一月一日

本誌に於ては、大正十一年の稲作試験の成績を報告する。

本誌に於ては、大正十一年の稲作試験の成績を報告する。

本誌に於ては、大正十一年の稲作試験の成績を報告する。

豫言



大正十一年度業務報告目次

第一、米麥作に関する事項

一、品種改良

- (一) 品種比較試験
- (二) 品種準備試験
- (三) 純系淘汰
- (四) 品種對多肥料試験
- (五) 植方疎密試験
- (六) 品種特性調査
- (七) 米原種圃
- (八) 配付成績
- (九) 原種査定作地

二、耕種法の研究

甲、苗代に関する調査

- (一) 苗代仕立方試験
- (二) 播種期試験
- (三) 播種量試験
- (四) 浸種期試験

乙、本田に関する調査

- (一) 豊凶考照試験
- (二) 耕鋤深淺對施肥量試験
- (三) 播種期對插秧期試験
- (四) 播種量對插秧苗數試験
- (五) 苗莖數對插秧苗數試験
- (六) 分種對株數試験
- (七) 苗代仕立方試験
- (八) 多肥料栽培
- (九) 裏作試験
- (一〇) 紫雲英併用肥料試験
- (一一) 濕田紫雲英肥料試験
- (一二) 窒素多施の場合に於ける燐酸加里用量試験
- (一三) 紫雲英乾燥施用試験
- (一四) 紫雲英石灰併用試験

丙、稻乾燥及貯藏に関する研究

- (一) 貯藏期延干試験
- (二) 概火力乾燥試験
- (三) 玄米火力乾燥試験

一、品種改良

- (一) 品種比較試験
- (二) 品種對多肥料試験

麥 (大正十年 秋期播種)

- (三) 麥原種圃
- (四) 耕種法
- (五) 配付成績
- 二、耕種法の研究
 - (一) 耕種機概観
 - (二) 三要素適量試験

第二、園藝作物に関する事項

- #### 甲、果樹
- (一) 和梨
 - (二) 洋梨
 - (三) 柿
 - (四) 桃
 - (五) 葡萄
 - (六) 雜果
- #### 乙、蔬菜
- (一) 茄子品種試験
 - (二) 枝條更新法に関する試験
 - (三) 香瓜品種試験
 - (四) 胡瓜品種試験
 - (五) 胡瓜苗仕立方試験
 - (六) 南瓜品種試験

- (七) 早生摘心及摘芽に関する試験
- (八) 南瓜、移植對假植試験
- (九) 越瓜及甜瓜品種試験
- (一〇) 菜豆(附輪豆)品種試験
- (一一) 枝豆品種試験
- (一二) 馬鈴薯品種試験
- (一三) 種薯新舊比較試験
- (一四) 種薯種方粗密比較試験
- (一五) 甘藷品種試験
- (一六) 甘藷増収試験
- (一七) 蔓豆品種試験
- (一八) 里芋早採試験
- (一九) 里芋品種試験
- (二〇) 植方對手入法試験
- (二一) 葱品種試験
- (二二) 春秋播葱比較試験
- (二三) 葱苗乾燥試驗
- (二四) 蘿蔔品種試験
- (二五) 蕪菁品種試験
- (二六) 結球白菜品種試験
- (二七) 苜蓿品種試験
- (二八) 草蓴品種試験
- (二九) 葱頭品種試験
- (三〇) 抵土對培土比較試験
- (三一) 葱頭種方粗密比較試験
- (三二) 甘藍品種比較試験

- #### 丙、花
- (一) 試作
 - (二) 委託試驗
 - (三) 葱
 - (四) 葱
 - (五) 葱
 - (六) 葱
 - (七) 葱
 - (八) 葱
 - (九) 葱
 - (一〇) 葱
 - (一一) 葱
 - (一二) 葱
 - (一三) 葱
 - (一四) 葱
 - (一五) 葱
 - (一六) 葱
 - (一七) 葱
 - (一八) 葱
 - (一九) 葱
 - (二〇) 葱
 - (二一) 葱
 - (二二) 葱
 - (二三) 葱
 - (二四) 葱
 - (二五) 葱
 - (二六) 葱
 - (二七) 葱
 - (二八) 葱
 - (二九) 葱
 - (三〇) 葱
- #### 丁、種苗配付
- #### 成、園藝品の加工

第三、養畜に関する事項

- (一) 養鶏
- (二) 養牛

第四、綠肥作物に関する事項

- (一) 耕種機概観
- (二) 紫雲英品種比較試験
- (三) 純系淘汰
- (四) 品種保存
- (五) 灌水回数試験
- (六) 四要素効果試験

- (六) 紫雲英施用時期試験
- (七) 紫雲英施用量試験
- (八) 紫雲英併用肥料試験
- (九) 紫雲英根部對莖葉部肥効比較試験
- (一〇) 輪作試験
- (一一) 綠肥見本栽培
- (一二) 紫雲英播種期對播種量試験(委託)
- (一三) 灌水回数試験(委託)
- (一四) 如地栽培用綠肥作物品種試験(委託)

第五、藥草栽培に関する事項

- #### 甲、泊美蘭に関する試験
- (一) 栽植適期試験
 - (二) 栽植深度試験
 - (三) 栽植距離試験
 - (四) 種球比較試験
 - (五) 三要素適量試験
 - (六) 追肥用量試験
 - (七) 腋芽採取試験
 - (八) 腐敗病豫防試験
 - (九) 蓋採収期試験
 - (一〇) 泊美蘭跡作經濟調査試験
 - (一一) 委託試驗

- #### 乙、罌粟に関する試験
- (一) 品種比較試験
 - (二) 播種期試験
 - (三) 阿片採取時期試験
 - (四) 阿片採取時刻試験
 - (五) 林間對花蕾摘去試験
 - (六) 罌粟跡作經濟調査試験
 - (七) 委託試驗

丙、其他の試験

- (一) 地黄栽植時期試験
- (二) 地黄栽植距離試験
- (三) 地黄栽植法試験
- (四) 地黄跡作經濟調査試験
- (五) 地黄委託試驗
- (六) 川芎栽植試驗
- (七) 川芎栽培時期試験
- (八) 續草栽植時期試験
- (九) 續草摘花試驗
- (一〇) 續草栽培時期試験
- (一一) 葱栽培時期試験
- (一二) 葱栽培法試験
- (一三) 土荆芥草三要素適量試験
- (一四) 加密兒列下種對移植適期試験
- (一五) 藥草見本栽培

第六、農具に関する事項

- (一) 犁比較試験
- (二) 農具の審査
- (三) 動力農具
- (四) 動力機利用の範圍
- (五) 農具の購入斡旋

第七、農藝化學に関する事項

- #### 一、栽培試験
- (一) 縣内各地土壤に對する三要素試験
 - (二) 窒素質肥料肥効比較試験
 - (三) 紫雲英石灰窒素混施試験
 - (四) 磷酸肥料肥効試験
 - (五) 過磷酸石灰並に瀝製骨粉比較試験
 - (六) 各種形態磷酸肥料比較試験
 - (七) 各種形態硫酸肥料比較試験
 - (八) 各種加里肥料肥効比較試験
 - (九) 各種加里肥料追肥試驗
- #### 二、調査
- (一) 各種有機質肥料の分解程度及其遲速に関する調査

- (一) 水稻生育各期に於る三要素吸収量及稻生育状況に關する調査
- (二) 土壤組織成分調査

三、施肥標準調査

- (一) 原地調査
- (二) 鉢試
- (三) 原地栽培試験
- (四) 分

四、分析

第八、病虫害に關する事項

甲、病害

- (一) 稻熱病對水稻品種試験
- (二) 稻熱病對肥料要素試験
- (三) 稻熱病對石灰施用試験
- (四) 麥斑葉病豫防試験
- (五) 紫雲英苗核の水田に於ける死滅日數試験
- (六) 紫雲英苗核の生活力に關する試験
- (七) 紫雲英苗核病に對する藥劑撒布試験
- (八) 紫雲英苗核病に對する灌水試験
- (九) 紫雲英種子浸水選効果試験

乙、害虫

- (一) 二化螟虫發蛾時期調査
- (二) 二化螟虫加害時期調査
- (三) 藁刈抵抗調査
- (四) 螟虫等二化期驅除効果調査
- (五) 螟虫卵寄生蜂に關する調査
- (六) 稻開花期に於ける葉鞘變色萎縮採影響調査
- (七) 野鼠窠扶助苗の配付

第九、練習生

第十、成績普及並に農事指導

第十一、其他の事項

大正十一年度業務報告

第一、米麥作に關する事項

水 稻

一、品種改良

甲、苗 耕種梗概

一、整地。前年暮に打起し高き畦形を作りて冬季に於る土壤の風化を圖り、四月上旬雜草を除去して馬耕し同月中旬、過燐酸石灰及藁灰を施して(藁灰を他のものと數日を隔つ)代播を爲し同十八日畦幅四尺、溝幅一尺の短冊形場床を作りて粉末鯀粕を床面に練り込み均し板を以て床面を均一ならしむ。

一、肥料。一步當用量左の如し。

人尿三貫 過燐酸石灰五十匁 鯀粕粉末百匁 藁灰二百匁

人尿三貫	100	100	100
過燐酸五〇匁	100	100	100
鯀粕粉末百匁	100	100	100
藁灰二百匁	100	100	100
計	300	300	300

一、選種。四月十日硫酸アムモニヤ液にて比重選を行ふ、其比重は左の標準に依る。

無芒種 一、二三 有芒種 一、〇八

浸種。四月十日より同十九日迄常に清水の流入交代する溜池中に浸種す。

播種。四月十九日及廿日の兩日に涉り一步當浸種三合(乾燥二合四勺の)割合にて播下せり。

播種後の管理。播種後四月中は晝間は淺く灌水し夜間及寒冷の日は深く灌水し五月上旬天候溫暖を加ふるに従ひ灌水は溝のみに止め連日床面を露出して光線及び溫熱を充分に土面及根元に透射せしむ又稗

種 類 成 分 一 窒 素 一 燐 酸 一 加 里

二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三
共	共	共	共	共	共	共	共	共
八、一三	八、一四	八、一五	八、一六	八、一七	八、一八	八、一九	八、二〇	八、二一
三、六七	三、六八	三、六九	三、七〇	三、七一	三、七二	三、七三	三、七四	三、七五
〇、六三	〇、六四	〇、六五	〇、六六	〇、六七	〇、六八	〇、六九	〇、七〇	〇、七一
二、一九	二、二〇	二、二一	二、二二	二、二三	二、二四	二、二五	二、二六	二、二七
二、五九	二、六〇	二、六一	二、六二	二、六三	二、六四	二、六五	二、六六	二、六七
六、四一	六、四二	六、四三	六、四四	六、四五	六、四六	六、四七	六、四八	六、四九
四、八七	四、八八	四、八九	四、九〇	四、九一	四、九二	四、九三	四、九四	四、九五
七、〇	七、一	七、二	七、三	七、四	七、五	七、六	七、七	七、八

右三十三系其偏差比較的少なく且つ試食の結果食味亦良好なりしを以て十二年度に於て之れが收量比較をなす豫定なり。

2、第三年目

品種 早千葉錦

系統	系統	系統	系統	系統
一八	一九	二〇	二一	二二
九	一〇	一一	一二	一三
號	號	號	號	號
大正十一年收量	大正十一年收量	大正十一年收量	大正十一年收量	大正十一年收量
三、〇五	三、〇五	三、〇五	三、〇五	三、〇五
二、一七	二、一七	二、一七	二、一七	二、一七
號	號	號	號	號
大正十一年收量	大正十一年收量	大正十一年收量	大正十一年收量	大正十一年收量
三、〇五	三、〇五	三、〇五	三、〇五	三、〇五

純系分離二年目より選抜せる早千葉錦二十一系に就き其の生産力の優劣を比較試験したる結果優良と認むるもの九系を選抜せり其の成績左の如し(各區五坪二區制)

二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一
五	四	三	二	一	〇	九	八	七	六	五
號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號
三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九
二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六
三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九
二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六	二、八六

4、第五年目

純系淘汰第四年目より選抜せる無芒愛國五系、早千葉錦三系、水島三系、珍好二系につき五年目に於て引續き收量比較をなしたる結果優良と認むるもの無芒愛國四系、早千葉錦三系、水島三系、珍好二系を選抜せり(各區五坪二區制)

甲品種 無芒愛國

系統	系統	系統	系統	系統
一	二	三	四	五
四	三	二	一	〇
號	號	號	號	號
三、五九	三、五九	三、五九	三、五九	三、五九
二、九二	二、九二	二、九二	二、九二	二、九二
三、五九	三、五九	三、五九	三、五九	三、五九
二、九二	二、九二	二、九二	二、九二	二、九二

三	四	五	六	七	八	九	一〇
九	八	七	六	五	四	三	二
號	號	號	號	號	號	號	號
三、〇九	三、〇九	三、〇九	三、〇九	三、〇九	三、〇九	三、〇九	三、〇九
七、九〇	七、九〇	七、九〇	七、九〇	七、九〇	七、九〇	七、九〇	七、九〇
三、〇九	三、〇九	三、〇九	三、〇九	三、〇九	三、〇九	三、〇九	三、〇九
二、九二	二、九二	二、九二	二、九二	二、九二	二、九二	二、九二	二、九二

3、第四年目

純系淘汰三年目に選抜せる水島十系、銀坊主十六系につき四年目に於て生産力の比較を行ひ其の中優良と認むるもの水島四系、銀坊主九系を選抜せり其の成績左の如し(各區五坪二區制)

乙品種 銀坊主

系統	系統	系統	系統	系統
一	二	三	四	五
四	三	二	一	〇
號	號	號	號	號
二、六二	二、六二	二、六二	二、六二	二、六二
二、五八	二、五八	二、五八	二、五八	二、五八
二、五九	二、五九	二、五九	二、五九	二、五九
二、四七	二、四七	二、四七	二、四七	二、四七
二、四九	二、四九	二、四九	二、四九	二、四九

乙品種 早千葉錦

系統	系統	系統	系統	系統
一	二	三	四	五
六	五	四	三	二
號	號	號	號	號
三、〇八	三、〇八	三、〇八	三、〇八	三、〇八
二、九三	二、九三	二、九三	二、九三	二、九三
二、九四	二、九四	二、九四	二、九四	二、九四
二、九一	二、九一	二、九一	二、九一	二、九一
二、八三	二、八三	二、八三	二、八三	二、八三

丙品種 水島

系統	系統	系統	系統	系統
一	二	三	四	五
七	六	五	四	三
號	號	號	號	號
二、六五	二、六五	二、六五	二、六五	二、六五
二、七三	二、七三	二、七三	二、七三	二、七三
二、六九	二、六九	二、六九	二、六九	二、六九
二、五九	二、五九	二、五九	二、五九	二、五九

丁品種 珍好

系統	系統	系統	系統	系統
一	二	三	四	五
〇	九	八	七	六
號	號	號	號	號
三、〇六	三、〇六	三、〇六	三、〇六	三、〇六
二、九三	二、九三	二、九三	二、九三	二、九三
二、九三	二、九三	二、九三	二、九三	二、九三
二、五九	二、五九	二、五九	二、五九	二、五九

四、品種對多肥料試驗

品種試驗及純系淘汰に依り選出せる優良品種及系統につき施肥量の多少と收量との關係を知らんが爲行へる

試験にして標準區、二倍區、三倍區に三別し銀坊主七系、無芒愛國五系につき試験を行ひたる成績左の如し

各區五坪一區制 普通植

標準區 堆肥三百貫、大豆粕五貫、鯨粕四貫、過燐酸石灰五貫、硫酸加里三貫、石灰五貫

二倍區、三倍區は堆肥標準區と同量とし其の他の全肥を漸次増加す

系統番號	標準肥料區			二倍肥料區			三倍肥料區		
	在來標準	一號	二號	一號	二號	三號	一號	二號	三號
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇

系統番號	標準肥料區			二倍肥料區			三倍肥料區		
	在來標準	一號	二號	一號	二號	三號	一號	二號	三號
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇

右成績を見るに銀坊主、愛國共に概ね二倍肥料區のもの成績良好にして之れより施肥量を増加するに従ひ却て收量を減する傾向あるを見る十二年度に於て更に連續試験の豫定なり。

(五) 植方疎密試験

本試験は優良と認むる品種銀坊主、無芒愛國各二系に就き一坪當り栽植株數の多少に依り收量に如何なる影響を及すやを知らんとするものにして其の試験成績左の如し。

各區五坪一區制 普通植

肥料を前記耕種梗概中生種の肥料に同じ

品種名	(距離、株間)	稈長	蓋數	反當米量
無芒愛國七六號	一尺に六寸	三、七	一、三	三、六
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同

右成績を見るに各試験區共密植のもの程幾分草丈、分蘗共に減少する傾向を示し反當收量に於ては密植のもの程漸次收量を増すも其の程度は品種により差異を示し無芒愛國種の如き分蘗比較的少なき品種は比較的分蘗力に富む。銀坊主の如きものに比すれば密植による增收更に大なるものあるを認む

(六) 品種特性調査

本縣に栽培せられつゝある水稻品種の特性並其の分布状況を調査攻究して本縣品種改良の基礎を確立せんとするものにして十一年度に於ては縣内各地方より集めたる粳二百三十五種、糯八十九種を栽培し一々其の特

系統番號	標準肥料區			二倍肥料區			三倍肥料區		
	在來標準	一號	二號	一號	二號	三號	一號	二號	三號
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇

性を調査すると共に優良と認むるもの粳百四十七種、糯二十八種を選抜し次年度收量調査用に供せり。

(七) 稻原種圃法

イ、耕種法

一、品種名及作付面積

品種名 大場、前澤、畿内、石白、無芒愛國、銀坊主、大場糯(以上七品種)

作付面積 六段歩

二、苗代

苗代の整地、施肥は普通耕種法と大差なきも品種系統間の混濁を避くるため畦、巻藁等を設けて之を區劃し四月中旬一步一合の割合にて播下せり、發芽後十五日乃至二十日にして苗の生育一、二寸に達せる頃間引移植を行ひ尚五月上旬以降は成る可く排水して徒長を防止すると同時に苗の生育を均一ならしむる様努む。

三、本田

普通田にありては五月中旬麥跡田にありては六月上旬耕起し更に耕耘、施肥して能く之を混和均一ならしめ種秧當日代掻を行へば、

四、施肥法

(甲) 乾田段當用量及三要素量左の如し

肥料種類	用 量	三要素量		
		窒 素	磷 酸	加 里
堆肥	200	12.00	1.00	1.00
石灰	200	1.79	1.00	1.00
大豆粕	25	1.00	1.00	1.00
過磷酸石灰	25	1.00	1.00	1.00
硫酸加里	25	1.00	1.00	1.00
計		17.79	5.00	5.00

(乙) 麥跡田段當用量及三要素量左の如し

肥料種類	用 量	三要素量		
		窒 素	磷 酸	加 里
堆肥	200	12.00	1.00	1.00
硫酸アンモニア	100	1.00	1.00	1.00
大豆粕	100	1.00	1.00	1.00
過磷酸石灰	25	1.00	1.00	1.00
硫酸加里	25	1.00	1.00	1.00
計		16.00	5.00	5.00

前記肥料は全量を基肥として施用す。
五、挿 秧
六月上旬並中旬に於て一步六十株一本植とせり。

し左記の通り之を配付せり。

品 種 名	作付面積	生産額数量	配付数量
大 場	1.4	3,131	3,131
前 澤	1.7	1,123	1,123
内 白	1.7	1,260	1,260
石 白	1.5	900	900
無 芒	1.4	3,295	3,295
銀 坊	1.4	2,337	2,337
大 場	1.4	2,337	2,337
計	16.0	13,555	13,555

配付別數量次の如し。
イ、採種圃に配付せるもの 八、二三九
ロ、參觀人に配付せるもの 二、九四
ハ、直接農家に配付せるもの 二、九七二
ニ、其の他に配付せるもの 一、六四六
ホ、原種査定試作地

目的 當場育成の優良品種につき縣内左記四箇所に其の試作地を設け比較栽培をなし其の優劣を確め原種を決定せん。

一、中新川郡西加積村大字大門
松井甚右衛門

- 六、除草及灌排水
除草回数、期日及灌排水の方法は一般耕種法に準ず。
 - 七、管 理
生育期間中數回圃場を巡視し左記に該當するものを悉く除去す。
 - 一、走 穂、遅 穂
 - 二、混 種、變 種
 - 三、形態變異の株
 - 四、發育不良及病虫被害株
 - 五、畦畔及異品種に接する二、三列
 - 八、收穫及貯藏
適當なる熟期に刈取り合掌稻架に懸け之を乾燥し調製には篩にて不完全粒を除去し唐箕選數回を行ひ得たる精選種子を俵裝して貯藏す。
 - 九、配付方法
無償配付
配付時期 三月中に配付を終了す
配付數量 拾參石壹斗壹升壹合
- 原種圃六段歩より精選種初拾參石五斗五升四合を收穫

- (一) 土 質 砂質壤土
- (二) 試作面積 三段歩
- (三) 一區面積 六 步
- (四) 區 制 二區制
- (五) 供用品種及系統數 六品種三十一系
- イ、水島五系(二九號、四〇號、五七號、六四號、六七號)
- ロ、早千葉錦十系(七號、四〇號、五六號、五八號、六八號、六九號、八九號、九一號、九六號、一〇八號)
- ハ、無芒愛國五系(二號、四七號、七六號、一〇四號、一五一號)
- ニ、銀坊主七系(一三號、二七號、三八號、九四號、一二四號、一五二號、一五三號)
- ホ、畿内一系(二二號)
- ヘ、大場糞三系(五號、九號、四八號)
- 一、下新川郡大布施村大字古御堂
伊 東 森 作
- 二、東新川郡西加積村大字大門
伊 東 唯 一
- (一) 土 質 壤質砂土

- 苗の生育との関係を知らんとするものにして前年より継続の試験なり其の方法左の如し。
- (一) 試作面積 三段歩
 (二) 一區面積 六歩
 (三) 區制 二區制
 (四) 供用品種及系統數六品種二十六系
 (五) 水 島五系
 (六) 無芒愛國五系
 (七) 銀坊主七系
 (八) 畿 內一系
 (九) 大場糯三系
 (一〇) 前澤五系(一九號、二八號、五一號、六〇號、一五七號)
- 系統番號は前項一の場合に同し
- 三、射水郡大江村大江農事研究會
- (一) 土 質 埴質壤土
 (二) 試作面積 三段歩
 (三) 一區面積 六歩
 (四) 區制 二區制
 (五) 供用品種及系統數五品種二十一系
 (六) 水 島五系
 (七) 無芒愛國五系
 (八) 銀坊主七系
 (九) 畿 內一系
 (一〇) 大場糯三系
- 系統番號は前項一の場合に同し

- 二、播種期試験
- 本試験は苗代播種期の遅速により移植當時の苗の生育に及ぼす影響を知らんとするものにして前年より継続の試験なり。
- (一) 播種期試験
 (二) 耕種法の研究
 (三) 苗代に關する調査 (供用品種大場)
- 本試験は苗代の整地及び管理を異にする各種の方法と
- (一) 苗代仕立方試験
 (二) 大場糯三系
 (三) 東礪波郡油田村大字堀内 芳里三輝
 (四) 無芒愛國五系
 (五) 供用品種及系統數六品種三十一系
 (六) 水 島五系
 (七) 早千葉錦十系
 (八) 無芒愛國五系
 (九) 銀坊主七系
 (一〇) 畿 內一系
 (一一) 大場糯三系
- 系統番號は前項一の場合に同し

六月四日挿秧當時の生育状況左の如し。

區別	生葉量	草丈	莖數	葉數	葉色	根の概況
一、水苗代	〇・八七五	二・六	八・五	二・五	濃綠色	淡褐色、細長
二、折衷苗代	〇・九三	二・五七五	三・三	九	濃綠色	濃褐色、太、鬚根最多
三、陸苗代	〇・八六	二・七〇	七・七	二・三	淡綠色	最弱剛短、鬚根最多

區別	方	法
一、水苗代	灌水して代播をなし一晝夜を經て落水し、揚床を短冊形に作り之に播種して種籾銀器により種籾を土表に播込み五月下旬迄は床面上五分乃至一寸位灌水し以後は單に溝中に灌水す	
二、折衷苗代	灌水せずして土壌を細碎し短冊形の高畦を作り一日畦上迄灌水して土壌中の空氣を排除し、後落水して播種し、約二分の厚さに砂を覆ひ、爾後常に溝底より一、二寸位の程度を以て灌水す	
三、陸苗代	灌水せずして土壌を細碎し短冊形の高畦を作り、播種後約二分の厚さに砂を覆ひ、更に濡れ藁を覆ふ此の藁は發芽するに及びて之を除く灌水は終始行はず	

三、播種量試験

本試験は苗代播種量の多少により苗の生育に及ぼす影響を知らんとするものにして前年より継続の試験なり播種後四十五日目即ち挿秧當時の苗の生育左の如し。

區別	生葉量	草丈	莖數	葉數	葉幅	莖數	葉數
一、合播	〇・三	八・八	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇
二、合播	〇・三	九・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇
三、合播	〇・三	九・六	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇

區別	生葉量	草丈	莖數	葉數	葉幅	莖數	葉數
大場	〇・七六五	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇
銀坊	〇・八二五	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇
主	〇・四四〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇

本試験は種籾浸種期日の長短が苗の發育に及ぼす影響を知らんとするものにして本年創始の試験なり、播種後四十三日目の苗の生育状況左の如し。

區別	重莖量	草丈	莖數	葉數	莖幅
十日浸	〇.五〇	八.六	一.八五	八.一	二.四
廿日浸	〇.五〇	九.〇〇	一.八三	八.六	二.八
卅日浸	〇.四九	八.七	一.八五	八.三	二.六

本試験は種籾の熟度と苗の生育との關係を知らんとするものにして本年創始の試験なり、播種後四十七日目の苗の生育状況左の如し。

區別	重莖量	草丈	莖數	葉數	莖幅
半熟	〇.五七	八.五七	一.九五	九.一	二.〇
黄熟	〇.七三	九.〇三	二.四	八.七	二.〇
過熟	〇.七三	九.〇九	二.六	九.四	二.一

本試験は苗代に芽乾及夜乾を行へば苗の生育に如何なる影響を及ぼすものなるやを知らんとするものにして

本年創始の試験なり、夜乾芽乾共に四月下旬各三回宛行ひたるに標準區は約二割の浮苗を生じたるも夜乾區は毫も之を生せず芽乾區は約五分の浮苗を生せり、播種後四十五日目の苗の生育左の如し。

區別	重莖量	草丈	莖數	葉數	莖幅
標準區	〇.四四	七.七	二.五	八.〇	一.四
夜乾區	〇.四九	八.四三	二.四	八.三	一.七
芽乾區	〇.六三	八.四	二.六	七.七	一.七

苗代の仕立方と地皮温との關係を四月廿一日より五月末日迄調査したる成績左の如し。

區別	最低	午前六時	同十時	午後二時	同六時	同十時
陸苗代	一.八	一.三五	二.〇七	三.三	一.八五	一.五
折衷苗代	一.八	一.三三	二.〇八	三.三	一.八八	一.五
水苗代	一.三八	一.四四	二.〇五	三.四	二.〇三	一.六

大塲、石白を晩稻に愛國、鍋割を用ゐ、各種とも四月二十日に下種し、六月二日に移植せり。本年の生育状況は、苗代期中は氣候適順、稻苗の生育頗る良好にして移植後亦高温多照、活着良しく、芽乾促進せられ、各種を通じて株張を増大したれども伸長や、抑制せられ、七月上旬の降雨により多少之を恢復したりしも、大暑に於ては左記の如く草丈平年に比して稍低きを示せり。

區別	午前六時	同十時	午後二時	同六時	同十時	平均
飽水區	三.八	三.一	三.三	一.九〇	一.五	一.八
水深五分區	三.九	三.二	三.六	一.九八	一.九	一.九
同一寸區	三.〇	三.〇	三.五	一.九	一.六	一.九
同一寸區	三.〇	三.〇	三.五	一.九	一.六	一.九
同二寸區	二.八	二.九	三.三	一.七	一.七	一.九

乙、本田に關する調査

耕種梗概

甲、苗代 前掲品種改良に同じ
乙、本田 肥料反當堆肥三百貫、大豆粕十貫、過燐過石灰五貫、藎灰十貫、石灰十貫
栽植形式 坪四十八株（一尺に七寸五分）
其他前掲品種改良に同じ

一、豊凶考照試験

本試験は毎年同一地に同種の稻を同一方法にて栽培し一定の時期に其の生育状況を調査し既往の成績と對照し以て其の年に於ける豊凶豫察の資たらしめんとするものにして供試品種として早稻に四谷、水島を中稻に

早	大正十一年		早	大正十一年	
	草丈	莖數		草丈	莖數
早稻	二.六	三.〇	早稻	二.六	三.〇
中稻	二.四	二.八	中稻	二.四	二.八
晚稻	二.三	二.七	晚稻	二.三	二.七

大暑後氣温高く、日照多く、氣候適順なりしが爲め出穂期を促進し二十十日の作況は草丈稍短きも株張は適に大なりしが、成熟期の過乾高温は其の登熟を過度に促進し、米粒の瘠小を招徠したるが爲に平年に比し、中稻は四分五厘を増せるも、早稻は三分五厘、晚稻は二厘を減せり、二十十日の作況及反當玄米收量左の如し。

本試験は前試験に對照し、稻苗分蘗數の多少と挿秧苗數の多少との關係を知らんとするものにして前年より繼續の試験なり、品種は大場にして、莖數多き程出穂期、成熟期等僅に早まれり、反當收量左の如し。

區別	大正十一年	同十年	二ヶ年平均
一、一莖苗	三、〇六	二、三二	二、七九
二、二莖苗	三、一七〇	二、三二八	二、七四九
三、三莖苗	三、三〇六	二、三三三	二、七二〇
四、四莖苗	三、三〇五	二、三三三	二、七二〇
五、五莖苗	三、三〇〇	二、三二七	二、七一三
六、六莖苗	三、二七〇	二、三二六	二、七〇八
七、七莖苗	三、〇〇三	二、二六三	二、六三三
八、八莖苗	三、〇〇三	二、二六三	二、六三三
九、九莖苗	三、〇〇三	二、二六三	二、六三三

六、分植對株數試驗
本試験は挿秧に際して一株を二手に分植することの可否及び分植と株數との關係を知らんとするものにして昨年より繼續の試験なり、供用品種は大場にして、六十株區は一株二苗宛、四十八株區は一株四苗宛とせり、四十八株區は六十株區に比し出穂、成熟共に約一日間遅延せり、成績左の如し。

區別	大正十一年	同十年	二ヶ年平均
六十株區 一手植	二、六〇四	二、三二五	二、四六五
六十株區 二手植	二、七五〇	二、三二〇	二、五三五
四十八株區 一手植	二、七五〇	二、三二〇	二、五三五
四十八株區 二手植	二、七五〇	二、三二〇	二、五三五

七、苗代仕立方試驗
本試験は苗代の整地及び管理を異にせし場合に本田の生育及び收量に對して如何なる影響を及ぼすものなるかを知らんとするものにして前年より繼續の試験なり、供試品種は大場にして仕立方は苗の生育に關する研究成績に記載せる如くに行ひ、本田は二區制とせり、出穂期は水苗代のもの他のものに比し三四日間遅延せり、生育狀況及び反當收量左の如し(二區平均)

區別	大正十一年	同十年	二ヶ年平均
水苗代	三、三〇三	三、三〇三	三、三〇三
折衷苗代	三、二〇〇	三、二〇〇	三、二〇〇
陸苗代	三、二〇〇	三、二〇〇	三、二〇〇

(八)、多肥料栽培

經濟的關係を度外し增收の極量を究むる目的にて左記の栽培を試みたるに幾分草出來徒長の嫌あり。甚しく倒伏し、充分に豫期の成績の擧ぐる事能はざりき、供用品種は銀坊主、耕鋤の深さ七寸、苗代は一步當一合播、挿秧は二手分植、一步四十八株、肥料は堆肥三百、紫雲英二百、鯨粕十、大豆粕五、硫酸アモンニア二、強過磷酸石灰三十、硫酸加里(三二%)十五、石灰三十なりとす、此成績左の如し。

區別	大正十一年	同十年	二ヶ年平均
多肥料栽培	三、七五五	四、二六六	三、九六〇
草丈	二、七五五	三、二〇〇	三、〇〇〇
莖數	三、三〇〇	三、三〇〇	三、三〇〇
反當收量	三、三〇〇	三、三〇〇	三、三〇〇

九、裏作試驗

本試験は稻の裏作として栽培する數種の作物には其の得失を知らんとするものにして本年創始の試験なり。方法左の如し。

區別	要項
一、標準區	耕種概に準じ稻(無芒愛國)のみを栽培す
二、紫雲英區	九月三日紫雲英(岐阜中生)播種、五月十一日刈取、標準區と共に稻植付

區別	裏作收量	玄米收量
一、標準區	地上部 六四三、〇二七	三、〇八六
二、紫雲英區	子實 三、二〇九	三、三一八
三、大麥區	九八八、七一九	三、一四六
四、甘藷區	四七四、六〇九	二、九三五
五、葱區	四五五、七〇七	三、〇一二
六、芽出馬鈴薯區	四一五、七六五	二、九七九
七、馬鈴薯區		

反當收量左の如し。
三、大麥區 十月廿六日大麥(大正麥)播種、六月六日刈取、同八日稻植付
四、甘藷區 四月廿九日甘藷(野崎早生)苗植付、六月中下旬刈取、同廿九日稻植付
五、葱區 十月十二日葱頭(エロダンバース)苗植付、六月廿九日收穫、即日稻植付
六、芽出馬鈴薯區 四月廿九日收穫、即日稻植付
七、馬鈴薯區 三月廿七日馬鈴薯(同右)植付、六月廿六日收穫、即日稻植付

區別	裏作	合計	差引
一、標準區	八三、三二四	三、〇八六	三、〇八六
二、紫雲英區	一八、四〇八	三、三一八	三、三一八
三、大麥區	三三、三三三	三、一四六	三、一四六

四、甘藷區	八三、〇六六	二九、七三三	二八、八五〇	二七、四〇二	二四、八八八
五、葱頭區	七八、三三七	二六、九〇九	二八、七三三	二七、〇五五	二六、九四四
六、芽出區	八一、五三九	二六、六九七	二八、三三三	二六、五五〇	二五、六六六
七、馬鈴薯區	八〇、五七〇	二六、四四四	二四、〇〇〇	二六、〇〇〇	二四、〇〇〇

(一〇) 紫雲英併用肥料試験

本試験は紫雲英を基礎肥料たらしむるに當り之に配合すべき適當なる窒素質補助肥料を知らんとするものにして前年より繼續の試験なり、窒素の用量は反當一〇三百多とし紫雲英併用區以外の各區には紫雲英二百を基礎肥料として施せり、磷酸加里は各反當二〇以上とし過磷酸石灰及糞灰を用ひ、此外に各區反當三〇の生石灰を施用せり、供試品種は大場にして成績左の如し。

區別	大正	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十一年平均
紫雲英併用	二、九一七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
硫酸アンモニア併用	三、〇四七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
石灰窒素併用	二、九一七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
大豆粕併用	二、九一七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
配合肥料併用	二、九一七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
餅粕併用	二、九一七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
餅粕併用	二、九一七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
鶏糞併用	二、九一七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三

本試験は稲作に對し窒素を特に多量に施用する場合に於ける磷酸加里の適量を知らんとするものにして前年より繼續の試験なり、品種は銀坊主を用ひ、窒素は反當四〇五百多を堆肥、大豆粕、餅粕、硫酸アンモニアにて施し、磷酸加里は過磷酸石灰及硫酸加里を用ひ其の他各區とも生石灰を反當一〇宛施せり、又耕鋤は特に約八寸に深耕せり、各區全部倒伏し、出穂期成熟期等大差なかりき、成績左の如し。

區別	大正	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十一年平均
磷酸加里	三、〇二七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
同	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
同	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
同	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
同	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三

(一一) 紫雲英乾燥施用試験

本試験は稲作に紫雲英を施すに當り豫め之を乾燥して施用する事の可否を知らんとするものにして大正九年よりの繼續試験なり、供試品種は大場にして紫雲英生草にて反當五百を施せり、出穂期、成熟期等に大差なく成績左の如し。

出穂期及成熟期には大差なし。
(二) 濕田窒素質肥料試験
本試験は濕田に於ける各種窒素質肥料の効果を知らんとするものにして大正七年以來の繼續試験なり、窒素の用量は反當二〇多とし、磷酸加里は各三〇以上とし、過磷酸石灰及硫酸加里を併用せり、供試品種は大場にして首箱區(紫雲英代用)堆肥區、無窒素區の草丈、分蘗等比較的劣り、倒伏最も輕微なりき、出穂期及成熟期には大差なかりき。

區別	大正	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十一年平均
無窒素	二、八〇〇	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
堆肥	二、八〇〇	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
首箱區	二、八〇〇	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
大豆粕	二、八〇〇	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
配合肥料	二、八〇〇	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
餅粕	二、八〇〇	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
餅粕	二、八〇〇	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
餅粕	二、八〇〇	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
餅粕	二、八〇〇	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
餅粕	二、八〇〇	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三

(一三) 窒素多施の場合に於ける磷酸加里用量試験

本試験は稲作に紫雲英を施すに當り石灰加用する事の可否並に其の適量を知らんとするものにして大正九年よりの繼續試験なり、供試品種は大場にして紫雲英反當四百を施せり、出穂期、成熟期等に大差なく、成績左の如し。

區別	大正	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十一年平均
紫雲英生草	二、九一七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
同二分の一に乾燥	二、九一七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
同四分の一に乾燥	二、九一七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三

(一四) 紫雲英石灰併用試験

本試験は稲作に紫雲英を施すに當り石灰加用する事の可否並に其の適量を知らんとするものにして大正九年よりの繼續試験なり、供試品種は大場にして紫雲英反當四百を施せり、出穂期、成熟期等に大差なく、成績左の如し。

區別	大正	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十一年平均
無石灰	二、八〇〇	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
石灰三十貫	二、九一七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
同五十貫	二、九一七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三
同七十貫	二、九一七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、三三三

(一五) 大豆粕處理法試験

本試験は稲作に對する大豆粕の肥効を最も有効ならしむるに適當なる處理法を知らんとするものにして前年より繼續の試験なり、品種は大場を用ひ、乾田と濕田

とに行へり、方法左の如し。

区別	要項
細粉区	大豆粕を細粉となして用ふ
米糠混合腐熟区	細粉大豆粕を米糠に混じり水を加へ、十日間腐熟して用ふ
堆肥混合腐熟区	細粉大豆粕を堆肥に混じり水を加へ、二週間腐熟して用ふ

此の成績次の如くにして出穂期、成熟期等に大差なし

区別	大正十一年	大正十年
乾田 米糠混合腐熟区	二、九七〇	二、九六〇
乾田 堆肥混合腐熟区	二、九八〇	二、九七〇
乾田 細粉区	二、九八〇	二、九七〇
温田 米糠混合腐熟区	二、九七〇	二、九六〇
温田 堆肥混合腐熟区	二、九八〇	二、九七〇
温田 細粉区	二、九八〇	二、九七〇

(六) 固形苦楮併用試験

本試験は稲の莖稈を強硬ならしむる爲に固形苦楮を併用するもの可否を知らんとするものにして前年より繼續の試験なり、供用品種は大場にして固形苦楮は六月中旬及七月上旬の二回に分ちせり、出穂期、成熟期は標準肥料區約一日遅れ倒伏亦標準肥料區僅に大なりし

この可否を知らんとするものにして前年より繼續の試験なり、供試品種は大場にして方法左の如し。

区別	要項
標準区	過磷酸石灰反常五貫を基肥に施す
磷酸追施肥區甲	右の二分の一を基肥に、二分の一を追肥(七月下旬)に施す
同 乙	右の全量を追肥(七月下旬)として施す

出穂期、成熟期等大差なきも、標準區は左の二區に比し倒伏や、甚しかりき、收量等左の如し。

区別	大正十一年	大正十年
標準區	三、〇二六	三、〇一六
磷酸追施肥區甲	三、〇二六	三、〇一六
同 乙	三、〇二六	三、〇一六

(二) 磷酸質肥料試験

本試験は稲作に對する各種磷酸質肥料の肥効を知らんとするものにして本年創始の試験なり、磷酸の用量は反當一貫五百匁とし窒素は一貫五百匁、加里は二貫匁とし前者堆肥、大豆粕、硫酸アンモニアを、後者は硫酸加里を併用せり、出穂期は米糠區、米糠油粕區は稍早きも成熟期には大差なく磷酸アンモニア區は倒伏

も顯著ならざりき。

区別	大正十一年	大正十年
標準肥料區	二、九七〇	二、九六〇
形固苦楮二十倍併用	二、九八〇	二、九七〇
同 四十倍併用	二、九七〇	二、九六〇

(七) 紫雲英堆肥々効比較試験

稻田の基礎肥料たる紫雲英と堆肥との肥効を比較し、併せて兩種を併用せる場合の肥効を比較せんとするものにして前年より繼續の試験なり、供用品種は大場に於て基礎肥料として堆肥區は堆肥三百匁、他區は之と同量の窒素を與へ、各區共大豆粕十匁、強過磷酸石灰五匁、黄灰十匁、石灰十匁を施せり、出穂期、成熟期等に大差なかりしも堆肥區の生育は他の二區に比しや、劣れり、收量等左の如し。

区別	大正十一年	大正十年
紫雲英區	二、九七〇	二、九六〇
堆肥區	二、九八〇	二、九七〇
堆肥併用區	二、九七〇	二、九六〇

(八) 磷酸追施肥試験

本試験は稲の出穂期に近づきて可溶性磷酸を追施肥する

甚しく磷酸アルミナ區及米糠油粕區は稍少し、供用品種は大場にして收量等左の如し。

区別	大正十一年	大正十年
強過磷酸石灰	二、八八一	二、八七〇
拘溶過磷酸石灰	二、七五五	二、七〇〇
磷酸アルミナ	二、九〇〇	二、八五〇
蒸製骨粉	二、九三二	二、八八〇
米糠油粕	二、八二二	二、七六六

(三) 分蘖、伸長に關する試験及調査

(イ) 苗分蘖の方向試験
挿秧に當り一苗宛を最も密に行ふ場合に稲苗の分蘖の方向を廣域に向はしむべきか(分蘖方向廣)又は狹域に向はしむべきか(分蘖方向縦)或は斜に向はしむべきか(分蘖方向斜)を知らんとするものにして一步百二十株植(廣域一尺、狹域三寸)供用品種大場として其の成績左の如し。

区別	莖長	一莖一株數	一莖一穂長(充實粒の數)
分蘖方向廣	三、三四四	六七	一八九
分蘖方向縦	三、三四四	六七	一八九

「大塙純」

三、右の後莖干一日粗「同」
右試験の結果、乾燥槽内に送入する熱風の温度は畧左記による時は甚しく胴割を生ぜしむる事無くして乾燥の目的を達し得るを認めたり。

粗の水分含量	熱風の温度(攝氏)
二一%以上	九〇度—一〇〇度
一九—二〇	八〇—九〇
一七—一八	六〇—七〇
一五—一六	五〇—六〇
一二—一四	四〇—四五

一時間に粗十六石に對して乾燥し得る水分量左の如し。

前年産夏越粗 〇、三九
本年産粗 〇、七一
粗摺歩合、玄米一升重量、玄米の剛度等火力乾燥と日光乾燥との間に差異なく、胴割は火力乾燥のもの遙に少なからむるを得べし。
精白歩合、精白の難易、釜殖の量、飯の品位共に火力乾燥と日光乾燥との間に差異なきが如し。

胴割の成生特に多く、即ち乾燥の當初は熱風温度を攝氏五〇—五五度たらしめ、其の後は四〇度を越えしむ可らざる事を知り得たり、又火力乾燥をなせる玄米は米粒膨大の觀ありて緊りなく、其の狀不乾燥米と大差なきのみならず外皮に毀傷を被る事多く甚しく光澤を失せり、又精白の際に碎米の成生多く、之等の惡影響は乾燥時間の長きに從つて大なり。

麥作 (大正十年 秋期播種)

一、品種改良

一、整地 耕種 梗概
水田裏作となし十月中旬犁にて乾田を耕起し馬糞にて土魂を碎き更に鋤返して畦底五尺に取り高畦の幅三尺八寸に仕上げて整地す。
播種期 十月廿五日及同廿六日
播種量 大麥三升、小麥、裸麥二升
播種法 高畦三尺八寸上に幅約九寸の播溝を二條を設け施肥覆土して種子を條播し薄く被土す。
施肥量 反當左の如し。

當場設備の乾燥機の一晝夜に於ける乾燥能率及粗一石に對する乾燥費左の如し。

種別	一晝夜の乾燥能率	粗一石當乾燥費
前年産夏越粗	一四二、二	〇、四八
雨天直後刈取直拔粗	四二、〇	〇、六一
晴天一兩日後刈取直拔粗	七七、六	〇、三二九
刈取當日地干粗	一〇九、七	〇、二三五
日光乾燥		〇、四四三
架干後莖干		〇、五七三
		〇、六八二

三、玄米火力乾燥試験
本試験は穀類乾燥機を用ひて玄米の乾燥を行ふ場合の最も適當なる方法を研究し其の經濟的關係及び能率を知り、併せて米質及び食味に及ぼす影響をも知らんとするものにして大正十一年十一月、十二月の兩月に涉り左記の本年産玄米に對し之が試験を行へり。
一、大 場 二回
二、無 芒 愛 國 一回
三、銀 坊 主 二回
試驗の結果、米の温度攝氏二五度を越えしむるときは

肥料種類	數量	施用方法	窒素	磷酸	加里
堆肥	四〇〇	全部基肥	二、〇〇〇	一、〇〇〇	二、五〇〇
硫酸アンモニア	六	基肥及追肥に二分し水に稀釋して施用し追肥は整春二回之を分施す	一、〇〇〇	—	—
大豆粕	二〇	全部基肥	〇、六三三	〇、一三三	〇、一三三
過燐酸石灰	二〇	—	—	二、〇〇〇	—
計	三〇	—	二、六三三	三、〇三三	二、六三三

一、管理 踏壓は二月廿一日、三月十八日の二回、土入は二月廿二日、四月四日、四月廿二日の三回之を行ふ。
一、收穫調整 穂首の黄變するを俟ち刈取り架乾を行ひ後調整す。

一、品種比較試験
本試験は大、小、裸麥の良好なる品種を蒐め本縣の風土に適應せる優良種を見出さんとするものにして縣内縣外産大麥四十種、小麥十六種、裸麥十三種に就き比較試験を行ひたる結果就中優良と認むるもの大麥二十三種、小麥八種、裸麥三種を選抜せり、其の成績左の如し(各區五坪一區制)
(甲) 大 麥

品名	取寄先	大正年 度収量	平均 収量	平均 年数
大正麥七號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥二號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥三號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥四號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥五號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥六號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥七號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥八號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥九號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥十號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥十一號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥十二號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥十三號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥十四號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥十五號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥十六號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥十七號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥十八號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥十九號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)
改良大麥二十號	常陸支場	二、三六	二、六六	大正八年より同十年まで (三箇年)

(乙) 小麥

品名	取寄先	大正年 度収量	平均 収量	平均 年数
赤達摩(標準)	常陸支場	一、二五	一、三五	九年より十年まで (二箇年)
伊賀筑後	常陸支場	一、二五	一、三五	九年より十年まで (二箇年)
早生小	常陸支場	一、二五	一、三五	九年より十年まで (二箇年)
雜一三	常陸支場	一、二五	一、三五	九年より十年まで (二箇年)
竹林二〇	常陸支場	一、二五	一、三五	九年より十年まで (二箇年)
州小	常陸支場	一、二五	一、三五	九年より十年まで (二箇年)
竹小	常陸支場	一、二五	一、三五	九年より十年まで (二箇年)
神力	常陸支場	一、二五	一、三五	九年より十年まで (二箇年)
大阪	常陸支場	一、二五	一、三五	九年より十年まで (二箇年)
屋根	常陸支場	一、二五	一、三五	九年より十年まで (二箇年)

(丙) 裸麥

品名	取寄先	大正年 度収量	平均 収量	平均 年数
コピンカダギ	常陸支場	一、四七	一、五七	九年より十年まで (二箇年)
神力	常陸支場	一、四七	一、五七	九年より十年まで (二箇年)
大阪	常陸支場	一、四七	一、五七	九年より十年まで (二箇年)
屋根	常陸支場	一、四七	一、五七	九年より十年まで (二箇年)

右の成績によれば大麥種中大正麥、關取、四條、三月等小麥種は赤達摩、雜十三號、珍好、寶滿等裸麥にありては大阪一號、神力裸等成績良好にして就中大正麥、關取、赤達摩の三種は既に原種として配付しつゝあり。

(二) 品種對多肥料試驗

本試驗は優良と認むる左記品種につき施肥量の増加に伴ひ生産力に如何なる影響を及すやを知らんとするものにして其の試驗成績左の如し。

各區五坪一區制

標準區 堆肥二百貫、硫酸サンモニア六貫、大豆粕十貫、過磷酸石灰十貫、輕灰二十貫とし五割増、二倍二倍半量區は堆肥は標準區と同量とし其他の肥料を漸次増加す。

品名	肥料區	五割増區	二倍量區	二倍半區
大正麥四九號	一、一三	一、九四	一、九八	二、三三
同七一號	一、一七	二、〇五	二、四九	二、八三
同六一號	一、一八	二、〇四	二、四八	二、八二
同三三號	一、二一	二、〇七	二、五二	二、八六
關取二號	一、二二	二、〇八	二、五三	二、八七
關取三號	一、二三	二、〇九	二、五四	二、八八
關取四號	一、二四	二、一〇	二、五五	二、八九
關取五號	一、二五	二、一一	二、五六	二、九〇
關取六號	一、二六	二、一二	二、五七	二、九一
關取七號	一、二七	二、一三	二、五八	二、九二
關取八號	一、二八	二、一四	二、五九	二、九三
關取九號	一、二九	二、一五	二、六〇	二、九四
關取十號	一、三〇	二、一六	二、六一	二、九五
關取十一號	一、三一	二、一七	二、六二	二、九六
關取十二號	一、三二	二、一八	二、六三	二、九七
關取十三號	一、三三	二、一九	二、六四	二、九八
關取十四號	一、三四	二、二〇	二、六五	二、九九
關取十五號	一、三五	二、二一	二、六六	三、〇〇
關取十六號	一、三六	二、二二	二、六七	三、〇一
關取十七號	一、三七	二、二三	二、六八	三、〇二
關取十八號	一、三八	二、二四	二、六九	三、〇三
關取十九號	一、三九	二、二五	二、七〇	三、〇四
關取二十號	一、四〇	二、二六	二、七一	三、〇五
關取二十一號	一、四一	二、二七	二、七二	三、〇六
關取二十二號	一、四二	二、二八	二、七三	三、〇七
關取二十三號	一、四三	二、二九	二、七四	三、〇八
關取二十四號	一、四四	二、三〇	二、七五	三、〇九
關取二十五號	一、四五	二、三一	二、七六	三、一〇
關取二十六號	一、四六	二、三二	二、七七	三、一一
關取二十七號	一、四七	二、三三	二、七八	三、一二
關取二十八號	一、四八	二、三四	二、七九	三、一三
關取二十九號	一、四九	二、三五	二、八〇	三、一四
關取三十號	一、五〇	二、三六	二、八一	三、一五
關取三十一號	一、五一	二、三七	二、八二	三、一六
關取三十二號	一、五二	二、三八	二、八三	三、一七
關取三十三號	一、五三	二、三九	二、八四	三、一八
關取三十四號	一、五四	二、四〇	二、八五	三、一九
關取三十五號	一、五五	二、四一	二、八六	三、二〇
關取三十六號	一、五六	二、四二	二、八七	三、二一
關取三十七號	一、五七	二、四三	二、八八	三、二二
關取三十八號	一、五八	二、四四	二、八九	三、二三
關取三十九號	一、五九	二、四五	二、九〇	三、二四
關取四十號	一、六〇	二、四六	二、九一	三、二五
關取四十一號	一、六一	二、四七	二、九二	三、二六
關取四十二號	一、六二	二、四八	二、九三	三、二七
關取四十三號	一、六三	二、四九	二、九四	三、二八
關取四十四號	一、六四	二、五〇	二、九五	三、二九
關取四十五號	一、六五	二、五一	二、九六	三、三〇
關取四十六號	一、六六	二、五二	二、九七	三、三一
關取四十七號	一、六七	二、五三	二、九八	三、三二
關取四十八號	一、六八	二、五四	二、九九	三、三三
關取四十九號	一、六九	二、五五	三、〇〇	三、三四
關取五十號	一、七〇	二、五六	三、〇一	三、三五
關取五十一號	一、七一	二、五七	三、〇二	三、三六
關取五十二號	一、七二	二、五八	三、〇三	三、三七
關取五十三號	一、七三	二、五九	三、〇四	三、三八
關取五十四號	一、七四	二、六〇	三、〇五	三、三九
關取五十五號	一、七五	二、六一	三、〇六	三、四〇
關取五十六號	一、七六	二、六二	三、〇七	三、四一
關取五十七號	一、七七	二、六三	三、〇八	三、四二
關取五十八號	一、七八	二、六四	三、〇九	三、四三
關取五十九號	一、七九	二、六五	三、一〇	三、四四
關取六十號	一、八〇	二、六六	三、一一	三、四五
關取六十一號	一、八一	二、六七	三、一二	三、四六
關取六十二號	一、八二	二、六八	三、一三	三、四七
關取六十三號	一、八三	二、六九	三、一四	三、四八
關取六十四號	一、八四	二、七〇	三、一五	三、四九
關取六十五號	一、八五	二、七一	三、一六	三、五〇
關取六十六號	一、八六	二、七二	三、一七	三、五一
關取六十七號	一、八七	二、七三	三、一八	三、五二
關取六十八號	一、八八	二、七四	三、一九	三、五三
關取六十九號	一、八九	二、七五	三、二〇	三、五四
關取七十號	一、九〇	二、七六	三、二一	三、五五
關取七十一號	一、九一	二、七七	三、二二	三、五六
關取七十二號	一、九二	二、七八	三、二三	三、五七
關取七十三號	一、九三	二、七九	三、二四	三、五八
關取七十四號	一、九四	二、八〇	三、二五	三、五九
關取七十五號	一、九五	二、八一	三、二六	三、六〇
關取七十六號	一、九六	二、八二	三、二七	三、六一
關取七十七號	一、九七	二、八三	三、二八	三、六二
關取七十八號	一、九八	二、八四	三、二九	三、六三
關取七十九號	一、九九	二、八五	三、三〇	三、六四
關取八十號	二、〇〇	二、八六	三、三一	三、六五
關取八十一號	二、〇一	二、八七	三、三二	三、六六
關取八十二號	二、〇二	二、八八	三、三三	三、六七
關取八十三號	二、〇三	二、八九	三、三四	三、六八
關取八十四號	二、〇四	二、九〇	三、三五	三、六九
關取八十五號	二、〇五	二、九一	三、三六	三、七〇
關取八十六號	二、〇六	二、九二	三、三七	三、七一
關取八十七號	二、〇七	二、九三	三、三八	三、七二
關取八十八號	二、〇八	二、九四	三、三九	三、七三
關取八十九號	二、〇九	二、九五	三、四〇	三、七四
關取九十號	二、一〇	二、九六	三、四一	三、七五
關取九十一號	二、一一	二、九七	三、四二	三、七六
關取九十二號	二、一二	二、九八	三、四三	三、七七
關取九十三號	二、一三	二、九九	三、四四	三、七八
關取九十四號	二、一四	三、〇〇	三、四五	三、七九
關取九十五號	二、一五	三、〇一	三、四六	三、八〇
關取九十六號	二、一六	三、〇二	三、四七	三、八一
關取九十七號	二、一七	三、〇三	三、四八	三、八二
關取九十八號	二、一八	三、〇四	三、四九	三、八三
關取九十九號	二、一九	三、〇五	三、五〇	三、八四
關取一百號	二、二〇	三、〇六	三、五一	三、八五

右表によれば各品種共施肥量を増すに従ひ収量を増し就中大正麥七一號、關取二號の二品種は成績良好なるを認む。

(三) 麥原種圖

肥料種類	用 量	窒 素	磷 素	硫 素	加 量
堆肥	二百貫	一、七〇	一、八〇	一、三〇	一、三〇
硫酸アンモニア	六貫	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇
大豆粕	十貫	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇
過磷酸石灰	十貫	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇
輕灰	二十貫	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇
計		三、七〇	三、八〇	三、三〇	三、三〇

硫酸アンモニアは基肥及追肥に二等分し水に稀釋して

甲、果樹

見本作果樹の種類、品種名及仕立法左の如し。

- 一、剪定 (一) 和梨
 - 冬季剪定 自三月九日至三月廿九日
 - 夏季剪定 自四月廿七日至九月四日
- 一、肥料 (十二年生以上樹反當量)

肥料名	用	量	原	肥	追	肥
大豆粕		50				
骨粉		30				
灰		300				
人糞		100				
木灰		100				

- 一、施肥期
 - 十一月十八日(原肥) 六月廿三日(追肥)
 - 十一月十四日 四月十日 六月十四日
- 一、摘果 年數回 六月八日
- 一、袋掛 自六月八日至六月十二日間

一、手入 病虫害の防除は數回行ひたり
 真鍮、長十郎、太平、早生赤、今村秋、晚三吉、赤龍
 其の他約廿三種
 整枝法は棚仕立、カンテラブル、ダイヤモンド、コルドンパーチカル、コルドンオブリキユ、バルメットホルゾンタル等各見本仕立として一般の参考に供しつゝあり。

(二) 洋梨

「ポーレヂツファ」「ヂュセスタンダレム」「バスクラツサン」「バートレット」等にして各ブツシユ仕立となす。

肥料名	用	量	原	肥	追	肥
大豆粕		50				
骨粉		30				
灰		300				
人糞		100				
木灰		100				

- 一、剪定 (三) 柿
 - 冬季 三月廿八日廿九日
 - 夏季 自五月十二日至八月一日間
- 一、肥料 (十二年生以上樹反當量)

肥料名	用	量	原	肥	追	肥
大豆粕		50				
骨粉		30				
灰		300				
人糞		100				
木灰		100				

- 一、施肥期
 - 十一月廿一日(原肥) 八月二日(追肥)
 - 十一月十八日 六月廿八日 四月十二日
- 一、摘果 年數回 六月八日
- 一、袋掛 自六月八日至六月十二日間

肥料名	用	量	原	肥	追	肥
大豆粕		50				
骨粉		30				
灰		300				
人糞		100				
木灰		100				

- 一、剪定 (四) 桃
 - 冬季 三月廿七日
 - 夏季 自四月廿六日至七月十九日間
- 一、肥料 (十年生以上樹反當量)

一、施肥期
 十一月廿二日(原肥) 六月廿三日(追肥)
 十一月十八日 四月十一日 六月廿八日
 六月五日(摘果)
 六月六日、七日(袋掛)
 酸曹液の濃度を異にせるものを五回撒布
 したり
 傳十郎、カールマン、天津、離核、水密、土用水密、大統領、プレコースクロンセルの七品種にして盃形状仕立なり。

(五) 葡萄

肥料名	用	量	原	肥	追	肥
大豆粕		50				
骨粉		30				
灰		300				
人糞		100				
木灰		100				

- 一、剪定 (五) 葡萄
 - 冬季 十二月十五日
 - 夏季 自五月一日至八月廿三日間
- 一、肥料 (七年生以上樹反當量)

一、中耕。十一月十八日 四月十三日 六月廿八日
 一、摘房及摘粒。七月十三日に「ブラックハンブルグ」のみに行ひたり
 一、手入。石灰、ボルドウ液及炭酸銅アンモニア液を數回散布したり
 「ゼツシカ」「ムウアスグイモンド」「レデー、ワシントン」「カタウバ」「デラウエア」「ブラックハンブルグ」「ハイラント」「ミルス」「スウキート、ウオーター」(以上露地栽培)
 整枝法は棚仕立改良ニツフィン仕立の二種あり。
 「フォスター、シードリング」「ブラック、ハンブルグ」「マスカット、ハンブルグ」「マスカット、アレキサンダー」「ゴールテン、クキーン」「グローコルマン」(以上玻璃室栽培)
 整枝法は單幹直立コルドン仕立なり。
 尚空間利用として鶏舎運動場六十坪に葡萄(甲州種)を明治四十三年栽植五本を栽培せり。
 六、雜果
 無花果、櫻桃の二種類計七品種

一、手入。蚜虫の驅除を三回行ひたり
 優良と認むべき左記九品種の試作を行ひたる成績次の如し。

品種名	反當收量	三ヶ年平均收量	品質	摘	要
行徳	一、九三、四〇〇	一、五九、八七五	稍上	早採りに可なるも盛夏	早採りに可なるも盛夏
早生	一、九三、二五〇	一、六三、二五〇	上	同上、但し褪色の度稍	同上、但し褪色の度稍
金澤	一、九八、九七五	一、八九、五七五	稍上	着色甚だ良好煮焼兼用	着色甚だ良好煮焼兼用
古河	一、二九、一五〇	一、〇〇、〇〇〇	上	着色長きも色良し、濃	着色長きも色良し、濃
橋田	二、三六、〇〇〇	一、九四、二五〇	稍上	濃茶盛夏と雖も褪色せず	濃茶盛夏と雖も褪色せず
眞黒	一、五七、七五〇	一、五三、七五〇	上	最有望種、濃色、濃	最有望種、濃色、濃
河邊	一、三〇、五〇〇	一、三四、八七五	中	青枯病の抵抗力強きも	青枯病の抵抗力強きも
東京中生山茄	一、三〇、五〇〇	一、三〇、七五〇	上	品質良好ならず、濃	品質良好ならず、濃
晩生丸茄	一、三〇、五〇〇	一、三〇、八七五	上	煮焼兼用、煮焼兼用	煮焼兼用、煮焼兼用

備考 表中平均收量欄に(1)又は(2)とあるは一又は二ヶ年平均收量を
 示すものなり以下之に準ず

(二) 枝條更新法に關する試験
 毎年盛夏の交は茄類の市價暴落し秋季に及び騰貴するを例とするを以て結顆の盛期に枝條の剪定を行ひて之を抑制し秋季優良なる顆を多量に生産せしめんとするものにして其の成績次の如し(供試品種東京中生山茄)

乙、蔬 菜
 (一) 茄子品種試験
 耕種梗概
 播種。三月九日(温床内)
 播種量。五勺(反當)
 飯植。四月十三日(温床内)
 待肥。四月十一日、一、定植。五月十一日
 距離。畦幅三尺、株間二尺
 肥料(反當)
 堆肥 原肥 三番肥 四番肥 五番肥 六番肥
 油糞 尿糞 糞肥
 強過 灰酸 四〇 五〇 三〇 一〇〇 一〇〇 一〇〇 一〇〇 一〇〇 一〇〇

追肥。五月廿五日 六月二十日 七月十五日
 中耕及土寄。八月十日 九月一日
 剪枝。六月十三日 六月廿日 七月十五日
 支柱建。五月廿二日
 敷藁。(一回)五月廿六日 (二回)六月十二日

試験區別	反當收量	採收期	摘	要
更新法を施さず	一、五〇、〇〇〇	自六月十五日 至十月廿五日	反當枯損株百本、秋季に 至り茄類の品質低下せり	
更新法を施す	一、三三、〇〇〇	右	反當枯損株三百本、秋顆 の品質大に向上せり	

備考 八月二十一日更新法を施せるものは主枝(一株三本主枝三又
 状せり)を各四節を残して副枝も亦各二節を残して夫々悉く剪
 枝したり

三、蕃茄品種試験
 試験成績次の如し。

品種名	反當收量	三ヶ年平均收量	品質	採收期
アーク	一、八八、七五〇	一、三三、二五〇	上	自七月十八日 至九月二十一日
アーリー	八四、三三〇	七九、五七五	上	自七月二十一日 至九月二十一日
スパーク	二、二六、二〇〇	一、七三、六〇〇	上	自七月二十五日 至九月二十一日
アーリアーナ	一、三〇、五〇〇	一、三三、二五〇	上	自七月二十五日 至九月二十一日
テーパークサイン	一、三〇、五〇〇	一、三三、二五〇	上	自七月二十五日 至九月二十一日
ロウグ、ケロツス	一、三〇、五〇〇	一、三三、二五〇	中	自七月二十五日 至九月二十一日

(四) 胡瓜品種試験
 耕種梗概
 播種。三月廿三日(温床内) 一、種子量 二合
 飯植。四月十五日(温床内) 一、待肥 四月十日
 距離。畦幅三尺、株間二尺 一、定植 五月十日

一、肥料(反當)

肥料名	用量	原肥	二番肥	三番肥	四番肥
堆肥	三〇〇	三〇〇			
大豆粕肥	二〇〇	二〇〇			
硫酸安母尼亞	二〇	二〇			
強過燐酸	二〇	二〇			
灰	二〇	二〇			

一、追肥中耕土寄 五月十八日、六月十四日、七月三日
 一、支柱建 五月廿五日
 一、敷葉 (一回)五月廿五日 (二回)六月十四日
 一、手入 四回ポルドー液撒布蚜虫驅除二回
 前年より繼續試験せるものにして栽培上の模範を示し併せて各品種の特性を知らんとするにありて其の成績次の如し。

品種名	反當收量	三ヶ年平均	品質	採收期
金澤筋成	一七六、六五五	一、五五、八九	上	自六月十日至八月五日
牛白筋成	一七六、四〇〇	一、五七、三五五	上	自六月十三日至八月五日
刈羽筋成	一、六三、五三三	一、二四、三三九	上	自六月十日至八月五日
金澤×牛白	一、六五、九三三	一、二五、九三三	上	自六月十三日至八月五日

品種名	反當收量	三ヶ年平均	品質	採收期
牛白×刈羽	一、七六、〇五五	一、七六、〇五五	上	同右
大布筋成	一、九三、三九九	一、九三、三九九	上	同右
青大筋成	一、六〇、七七〇	一、六〇、七七〇	上	同右
聖護院筋成	一、四三、八七五	一、四三、八七五	上	同右

五、胡瓜苗仕立方試験
 胡瓜苗養成上如何なる方法に倚るを可とするやにつき試験せしに其の成績次の如し(供試品種金澤筋成)

試験區別	反當收量	三ヶ年平均	採收期
直播	一、〇九、九四九	一、二〇、三三九	自六月廿一日至八月五日
冷床播假植せず	一、〇七、〇二八	一、〇七、〇二八	自六月七日至八月五日
温床播一回假植	一、四三、六六三	一、四三、六六三	自六月十日至八月五日
同上二回假植	一、七三、六六八	一、七三、六六八	自六月七日至八月五日

六、南瓜品種試験

假植を除きては生育を阻害せられたり
 一、播種 四月一日(温床内)
 一、播種量 反當二合五勺
 一、定植 四月十五日(温床内)
 一、定植 五月一日(二回仮植のもの五月十日)

一、距離 畦幅六尺、株間四尺 一、肥料(反當)

肥料名	用量	原肥	二番肥	三番肥
堆肥	一〇〇	一〇〇		
大豆粕肥	一〇〇	一〇〇		
強過燐酸	二五	二五		
灰	二五	二五		

一、追肥中耕及土寄 五月十八日 六月十三日
 一、敷葉 一回五月十一日 三回六月十三日
 一、摘心 五月廿五日
 一、手入 三回三斗式ポルドー液撒布
 前年よりの繼續試験にして其の成績次の如し。

品種名	反當收量	三ヶ年平均	品質	採收期
早生小南瓜	八六、五八八	八六、五八八	中	自七月十八日至八月廿七日
改良菊座	八三、二五〇	八三、二五〇	上	自七月廿六日至八月廿七日
備前	九二、五〇〇	八五、〇八七	中上	同右
糸南	一、七五、七七〇	一、七五、七七〇	最上	自七月十八日至八月廿七日
縮ケ	一、七五、七七〇	一、七五、七七〇	最上	同右
鹿ヶ谷	一、七五、七七〇	一、七五、七七〇	最上	同右

(七) 早生 南瓜 摘心及摘芽に関する試験

早採用南瓜栽培の目的を以て早生小南瓜を供試し摘心及摘芽に関する試験を行ひたる成績次の如し。

試験區別	反當收量	三ヶ年平均	採收期
自然に放任す	八五、三三三	八五、三三三	自七月十八日至八月廿七日
主腋蔓三本を残す	六六、〇〇〇	六六、〇〇〇	同
一回摘心四枝を發生せしむ	九三、三三三	九三、三三三	同
同上各節根を剪去す	七五、〇〇〇	七五、〇〇〇	同
同上後二回摘心を行ふ	七九、九三三	七九、九三三	同

早生種にありては摘心せざる方早採に適し收量も亦多し加ふるに手数を要せざるを以て有利なるもの、如し然して同一距離の場合主液三本残せしものは收量上最も遜色あるもの、如し。

(八) 直播、移植對假植試験

試験區別	反當收量	三ヶ年平均	採收期
直播	七九、〇〇〇	八二、五〇〇	自七月廿一日至八月廿七日
冷床播假植せず	八二、〇〇〇	八二、五〇〇	自七月十八日至八月廿七日
温床播一回假植す	八二、〇〇〇	八七、六三三	同右
同上二回假植す	四三、五〇〇	七二、七七〇	自七月廿六日至八月廿七日

(ロ) 秋作

品種名	栽植期	採收期	反當量	三ヶ年平均量
マイ、クサシ	六月三十日	十月十三日	一〇、二九六	(1) 一〇、九六五
スノウ、フレキ	同	同	五、三五〇	(1) 五、三五〇
アイリー、ピウチ	同	同	五、三七五	三、七七一
イオブ、ヘブロン	同	同	三、〇〇〇	一、七七八
同上	八月十日	十一月廿二日		

(三) 種薯新舊比較試験

夏作用の種薯として前年の新舊種薯中何れが良好なるやを知らんとするものにして其の成績次の如し(供試)

試験區別	反當量		摘	要
	反當量	反當量		
標準區(株間八寸種薯)	四、二〇〇	五、六六五	二ヶ年平均収量は種薯を差引かざるものなり	同上に壁の中間に厚さ六尺の竹を建て之に横に三段繩を張り、二尺五寸上を一尺八寸株間に特別大苗を挿したる母薯を四本とせり
同上(株間一尺)	三、七〇〇	五、七〇〇		
同上(大薯)	五、八〇〇	六、〇〇〇	同	同
同上(株間)	三、〇〇〇	六、八七五	同	同
同上(二尺畦)	三、〇〇〇	六、八七五	同	同

備考 標準薯は一個八匁、大薯は一個十三匁、小薯は一個五匁のものなり

(一五) 甘藷品種試験

一、薯 耕種梗概
三月三十日(温床内)

肥料名	原肥	肥料名	原肥
灰肥	二〇〇	米糠	二〇〇

一、中耕 六月十四日 六月廿七日
一、蔓返 七月十日 七月十六日 八月一日
一、收穫 十月三十日
前年と繼續し左記品種につき其の収量を調査せり。

品種名	反當量	三ヶ年平均量	摘	要
紅赤	四、二〇〇	四、七〇〇	上	埼玉縣の原産、品質良く一般に歡迎せらる
大正赤	四、二〇〇	四、七〇〇	上	同上、千葉の原産
大正白	四、二〇〇	四、七〇〇	中	矮性、莖葉青く薯白し、肥地に適すもの、如し
黒蔓	四、二〇〇	四、七〇〇	中上	蔓及葉脈黒紫色を呈し、幾分早生なるもの、如し
薄赤(紅薄)	四、二〇〇	四、七〇〇	中上	本縣山間部に栽培せられ諸に淡紅色を帯ぶ

(一六) 甘藷増収試験
甘藷増収に關し各種の栽培法を研究せんと欲し紅赤種につき試験せるに其の成績次の如し。

試験區別	反當量	三ヶ年平均量	摘	要
標準區(普通栽培)	三、七〇〇	三、七〇〇	平均二尺畦上一尺二寸株間	
反當量	三、七〇〇	三、七〇〇		
合計	三、七〇〇	三、七〇〇		

品種「アイリー、ピウチ、オブ、ヘブロン」

試験區別	反當量	合計	三ヶ年平均量	備考
夏薯區	五、九〇〇	一六、〇〇〇	四、八三三	發芽最早し
秋薯區	四、三〇〇	一三、八七五	四、五二五	
二度薯區	五、三〇〇	一五、九二五	五、〇〇八	發芽最遲し

(一四) 種薯植方粗密比較試験

植方の疎密と種薯の大小に因る影響を知らんとするもの其の成績次の如し(供試品種「アイリー、ピウチ、オブ、ヘブロン」)

一、種薯量 反當十五匁(平均一本四十匁のもの)
一、整地 五月四日
一、苗切及挿植 五月十六日(根元を南方に向け約三節土中に釣針植とす)
一、距離 二尺畦一尺二寸株間 一、肥料(反當)

支柱建を行ふ	支	摘	要
支	六、八八	六、八八	同上に壁の中間に厚さ六尺の竹を建て之に横に三段繩を張り、二尺五寸上を一尺八寸株間に特別大苗を挿したる母薯を四本とせり
永式	五、〇〇	五、〇〇	同上に壁の中間に厚さ六尺の竹を建て之に横に三段繩を張り、二尺五寸上を一尺八寸株間に特別大苗を挿したる母薯を四本とせり
折衷章魚植	三、三〇	三、三〇	同上に壁の中間に厚さ六尺の竹を建て之に横に三段繩を張り、二尺五寸上を一尺八寸株間に特別大苗を挿したる母薯を四本とせり

(一七) 薑品種試験
薑葉用として左記品種につき調査せるに其の成績次の如し。

品種名	反當量	三ヶ年平均量	採	期
茅中	二、二〇〇	二、二〇〇	自八月廿四日至九月一日	右
根薑	二、二〇〇	二、二〇〇	同	同

(一八) 里芋早採試験

一、種芋量 三十匁(反當)
一、栽植 四月十三日(早植) 四月廿一日(標準)
一、栽培法 麥甕中に深き作條を穿ち種芋の頭を上配置し約一寸厚さに覆土せり
一、距離 二尺五寸畦一尺五寸株間
一、肥料(反當)

九條太葱	同	一三三、二〇〇	三、四〇〇	一三六、六〇〇	七五、五〇〇	上	軟化部稍細く長一尺余、分蘖歩合多秋播に比して少し
リキ	同	七七、〇〇〇	五、三〇〇	八三、三〇〇	七三、六〇〇	上	軟化部太く長さ七寸余分蘖せず
金澤秋蒔	同	六八、六〇〇	二四、〇〇〇	七〇、六〇〇	七三、六〇〇	稍上	軟化部太く長さ一尺二寸余、分蘖歩合少二乃至三本葉大
九條太葱	同	七四、八〇〇	四四、〇〇〇	八元、八〇〇	八元、八〇〇	上	軟化部稍細く、長さ一尺一寸余、分蘖多三乃至四本多きは七乃至八本

前年よりの繼續試験にして其の成績次の如し(供試品)

試験區別	反當		計量	三ヶ年平均	摘	要
	中以上品	中以下品				
秋播區	六二、〇〇〇	三、〇〇〇	六五、〇〇〇	七五、三〇〇	植付後澁條欠潰のため倒伏し直に應急手當をせしめ是かため生育を阻害せられたり、軟化部は長さ一尺五寸分蘖歩合稍多し	
春播區	八九、五〇〇	八、〇〇〇	九七、五〇〇	七〇、二五〇	前項の戻なかりしも軟化部太く長一尺三寸余分蘖歩合少かりき	

備考 秋播葱を春播葱と同時期に收穫する様にせば概して秋播の方收量多きを常とすれども品質が粗剛なるを免れざるもの、如し然れ共其の外割優美にして市場に大に歡迎せらるゝを知れり

三、葱苗乾燥試験
九條葱栽培上定植前苗を乾燥することの可否を知らんとするものにして其の成績次の如し。

試験區別	反當	計量	二ヶ年平均	摘	要
標準區(非乾燥)	七四、四〇〇	二四、〇〇〇	九八、四〇〇	七五、八〇〇	兩區共秋播し翌年六月十九日に各定植したり
乾燥區(七日間)	六六、〇〇〇	二五、〇〇〇	九一、〇〇〇	七六、五〇〇	苗乾燥後莖部は約四寸を殘し其の尖端葉部を切り棄て定植したり

(二) 蘿蔔品種試験

耕種梗概

一、整地 七月十二日(早播) 八月廿二日(標準)
 二、播種 七月廿九日(早播) 八月廿六日(標準)
 三、播種量 九合(反當)
 四、距離 四尺壘上中央一尺五寸を距てて二條播、株間は聖護院一尺五寸、澤應用六寸、其他八寸
 五、肥料 何れも四回に行へり
 六、肥料(反當)

堆肥 糞尿糠肥
 追肥中耕 八月十日 八月廿八日(早播)
 九月十三日 九月廿七日(標準)
 手入 害虫の防除は十分に行ひたり
 收穫 自九月十八日至九月三十日(早播)
 十一月廿二日(標準)

品種名	反當		計量	三ヶ年平均	品質	摘	要
	中以上品	中以下品					
聖護院	一七九、五〇〇	一、七〇〇	一八〇、二〇〇	一六五、〇〇〇	上	煮食用	
宮方原	一四九、〇〇〇	一、四〇〇	一五〇、四〇〇	一八〇、七二二	稍上	煮食用、漬物兼用	
早生方原	一四九、〇〇〇	一、四〇〇	一五〇、四〇〇	一八〇、七二二	上	同上、淺漬用に一層可なり	
阿重(澤應用)	一四九、〇〇〇	一、四〇〇	一五〇、四〇〇	一八〇、七二二	稍上	同上	
宮方原	一四九、〇〇〇	一、四〇〇	一五〇、四〇〇	一八〇、七二二	中	澤應用	
鳴村	一四九、〇〇〇	一、四〇〇	一五〇、四〇〇	一八〇、七二二	上	大正九年度は一尺株間とせり	
方領	一四九、〇〇〇	一、四〇〇	一五〇、四〇〇	一八〇、七二二	同	同上	

(二五) 蕪菁品種試験

品種名	反當		計量	二ヶ年平均	品質	摘	要
	中以上品	中以下品					
聖護院	一三三、八五〇	二、四〇〇	一三六、二五〇	一四四、三三〇	上上	扁球、純白、大	
近江	一四三、三三〇	二、七三三	一四五、〇六三	一七〇、七九九	上上	扁圓、肩淡綠、大	

富山 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十

(六) 結球白菜品種試験

肥料名	用 量	原 肥	二 番 肥	三 番 肥	四 番 肥
堆肥	1000	1000	1000	1000	1000
大豆粕肥	1000	1000	1000	1000	1000
硫酸安母尼亞	1000	1000	1000	1000	1000
強過燐酸	1000	1000	1000	1000	1000
灰	1000	1000	1000	1000	1000

一、整地 八月十日
 二、播種 八月十九日
 三、間距 一合五勺(反當)
 四、離種 二尺五寸畦幅、二尺株間
 五、肥料 八月廿五日、八月廿九日、九月五日、九月十一日、九月十八日、九月二十五日
 (反當)

芝罘	包頭	金州	直隸	開城
一、三、八、六、七	一、三、三、七、〇	一、三、三、〇、〇	一、三、三、〇、〇	一、三、三、〇、〇
一、三、五、三、最上	一、三、三、〇、同	一、三、三、〇、同	一、三、三、〇、同	一、三、三、〇、同
鮮虫の被害最も少かりき	鮮虫の被害少かりき	鮮虫被害少かりき	鮮虫被害少かりき	鮮虫被害多かりき

(七) 松菜品種試験

肥料名	用 量	原 肥	二 番 肥	三 番 肥
堆肥	1000	1000	1000	1000
大豆粕肥	1000	1000	1000	1000
硫酸安母尼亞	1000	1000	1000	1000
強過燐酸	1000	1000	1000	1000
灰	1000	1000	1000	1000

一、整地 八月廿九日
 二、播種 九月二日
 三、間距 二合五勺(反當)
 四、離種 四尺壟上中央一尺五寸を距てて二條播、株間一尺
 五、肥料 五回に行へり
 (反當)

一、追肥中耕 九月十五日 十月五日
 二、手入 白菜に同じ

品 種 名	反當收量	二ヶ年平均	品 質
開城白	1,300	1,400	上上
山東白	1,300	1,400	上上
改良白	1,300	1,400	中上
廣島	1,300	1,400	上上
京菜	1,300	1,400	上上

(六) 草苺品種試験

一、定植 大正九年九月廿一日
 二、間距 四尺壟上三條植とし株間は一尺とす
 (反當)

品 種 名	反當收量	二ヶ年平均	品 質
エキシヨルシヨア	1,300	1,400	中
サージョセフパツクストン	1,300	1,400	上上
レーテストゴブ、オール	1,300	1,400	上上

一、追肥 六月廿一日(原肥)九月十六日
 二、中耕 三月廿八日(大正十二年)
 三、施肥 四月十九日
 四、摘葉 自五月十五日至十月廿五日(五回)
 五、除葉 六月十六日

(元) 葱頭品種試験

播種 九月七日(大正十一年)
 播種量 四合(反當)
 間引 九月廿五日 十月三日 十月十四日
 本圃整理 十月十八日
 移植 十一月六日
 距離 四尺壘上一尺を距て、三條植株間五寸
 肥料 (反當)

(三) 播土對培土比較試験

品名	反當數	收量	三ヶ年平均收量	摘
エロウ、グローブアンパース(當場採種)	一六〇、五〇	七三、七〇	七三、七〇	形態最揃へり
石川丸	一五〇、〇〇	七三、七〇	七三、七〇	大小稍不揃なりしも丸形のもの多かりき
石川丸	一六〇、五〇	七三、七〇	七三、七〇	白色早生種
大面改丸	一六〇、五〇	七三、七〇	七三、七〇	大正九年度成績
アラントレーザチーフド	一六〇、五〇	七三、七〇	七三、七〇	同上(白色種)
エロウ、グローブアンパース(庄瀬)	一六〇、五〇	七三、七〇	七三、七〇	大正十年度成績
石川丸	一六〇、五〇	七三、七〇	七三、七〇	同上
シバ	一六〇、五〇	七三、七〇	七三、七〇	同上
森仙園特撰黄玉葱	一六〇、五〇	七三、七〇	七三、七〇	同上
庄瀬改丸	一六〇、五〇	七三、七〇	七三、七〇	同上

前年より繼續試験其の成績次の如し(供試品種石川丸形)

肥料名	用量	原肥	二番肥	三番肥	四番肥	五番肥
堆肥	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大豆	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人糞	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
強過燐	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
灰	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

追肥中耕 十二月七日 三月廿一日(以下大正十二年) 四月十四日 五月二日
 十二月七日壘上に糞を撒布して防寒用
 七月七日(十二年) 七月七日(十二年) 七月七日(十二年)
 收穫 七月七日(十二年)

(三) 葱頭植方粗密比較試験

試験區別	反當數	收量	三ヶ年平均收量	摘
播土培土共に行はす 二回播土して球を半ば現はす 二回培土して球を隠す	一五七、五〇	七四、八〇	六四、四七	標準區に比し稍扁平なり
三、五寸壘上中央一尺五寸を距て、二條植とす(五寸株間)	一五七、五〇	六八、〇〇	六四、四七	標準區にして比し概して丸形のもの多し
同上 三條植とす	一五七、五〇	六八、〇〇	六四、四七	
四尺壘上三條植とす	一五七、五〇	六八、〇〇	六四、四七	
四尺壘上四條植とす	一五七、五〇	六八、〇〇	六四、四七	
四尺壘上五條植とす	一五七、五〇	六八、〇〇	六四、四七	
五尺壘上横に一尺二寸距て、雁木植とす	一五七、五〇	六八、〇〇	六四、四七	

(供試品種「エロウ、グローブアンパース」)

(三) 甘藍品種比較試験

播種 四月六日 六月二日 九月廿六日
 播種量 三乃至五勺(反當)
 間引 二、三回に行へり
 移植 春播夏播は二回、秋播は一回
 六月十九日 七月廿八日 四月四日
 (大正十二年)

肥料名	用量	原肥	二番肥	三番肥
堆肥	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大豆	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人糞	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
強過燐	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
灰	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

距離 畦幅二尺乃至二尺五寸、株間一尺五寸乃

一、追肥中耕及土寄
 七月二日 七月十七日(春播)
 八月一日 八月廿九日(夏播)
 四月廿一日 五月五日(秋播)

品名	平均一個の重量	結球歩合	各年平均反當量	摘	要
野崎早生	(10)	93.0%	1,633.0	自八月五日	平均一個の重量及結球歩合欄の括弧内の數字は年度を示すにあり 假令野崎早生の如きは大正十年度の平均一個の重量及結球歩合を現はすものとす
アーリー、ボール	(9)	75.0	733.8	自八月廿一日	
オールヘッド、アーリー	(10)	93.0	1,050.0	自八月廿一日	
アーリー、サンヨヤ	(9)	89.0	1,191.0	自八月廿一日	
愛知中生	(8)	100.0	1,066.3	自八月廿一日	
アラット、グッチ	(10)	100.0	944.9	自八月廿一日	
サクセツション	(10)	99.0	1,050.0	自八月廿一日	
パンダーゴ	(10)	99.0	1,050.0	自八月廿一日	
野崎早生	(10)	93.0	1,633.0	自八月廿一日	
アラットグッチ	(10)	99.0	1,050.0	自八月廿一日	

品名	個反當數	重量	二ヶ年平均反當量	採收期	摘	要
野崎早生	2,100	399.6	386.5	自八月五日	大正十年度枯損多かりき	大正十一年度枯損多かりき
アラットグッチ	2,160	441.8	441.8	自八月廿一日		
サクセツション	1,700	277.0	387.0	自八月廿一日		
パンダーゴ	1,860	370.6	455.3	自八月廿一日		
野崎早生	2,100	399.6	386.5	自八月五日		
アラットグッチ	2,160	441.8	441.8	自八月廿一日		
サクセツション	1,700	277.0	387.0	自八月廿一日		
パンダーゴ	1,860	370.6	455.3	自八月廿一日		
野崎早生	2,100	399.6	386.5	自八月五日		
アラットグッチ	2,160	441.8	441.8	自八月廿一日		

以上の外蔬菜の種類又は品種特性、栽培法を一般に周知せしむるため試作せるもの次の如し。

- 一、西瓜(五種)
- 二、咲分花豆
- 三、玉高苣(春秋二回)(三種)
- 四、野蜀葵
- 五、廿日大根(年數回)
- 六、小蕪(春秋二回)
- 七、防風
- 八、パーセリー(春秋二回)
- 九、セルリアック(根塘高)
- 十、セルリー(二種)
- 十一、花椰菜(春秋二回)(三種)
- 十二、ローキ
- 十三、胡蘿蔔(春播)(二種)
- 十四、瓢箪
- 十五、美濃早生大根
- 十六、春夏大根(三種)
- 十七、蕪菜(春秋二回)
- 十八、波菘(年三回)(二種)
- 十九、高菘(春秋二回)
- 二十、豌豆(四種)
- 二十一、蠶豆(二種)
- 二十二、土當歸
- 二十三、食用百合
- 二十四、冬瓜

三、委託試験
 主要蔬菜栽培方法を周知せしめ且稲田二毛作獎勵の目的を以て左記諸郡に委託試験を施行せり。
 優良種の普及並に栽培法改善の目的を以て委託試験せしが其の成績次の如し。
 擔當者 東礪波郡中野村 羽柴丹藏

更に大正九、十兩年の成績を参考のため左に登載す。
 擔當者 下新川郡柵山村 高見啓次(大正九年)

品名	播種期	假植期	定植期	反當量	計	備	考
千住黒柄	四月十三日	六月十三日	七月十九日	六六〇.〇	八三〇.九	耕土淺きため植溝深くする前ばさるに付軟化部比較的長かりき	同 郡下野方村 廣田健太郎(同十年)
千住合柄	同	同	同	二九〇.〇	六四〇.七	同上	
金澤	同	同	同	五〇〇.〇	七三〇.七	同上	
九條太葱	同	同	同	六〇八.九	八七〇.八	同上	
千住黒柄	大正九年度	大正十年度	二ヶ年平均反當量	四九〇.八六六	六八〇.三三三	大正十年度は風害を蒙り殆んど全滅に近き結果を呈せり	
特撰千住黒柄	大正九年度	大正十年度	二ヶ年平均反當量	四九〇.八六六	六八〇.三三三	同上より稍被害少し	

金澤	一二四、五〇〇	四七、四八	八五、六四	同
九條太葱	一二四、五〇〇	四八、七五	八五、五八	同上

(ロ) 葱
水田二毛作として玉葱栽培奨励の目的を以て委託試験せしが其の成績次の如し。

擔當者 下新川郡青木村農會

品名	反當	收量	備考
石丸黄玉葱	一六、五五	四六、六九五	
石丸丸形	一六、〇六五	四九、一〇〇	

エロウケローブ
タンパス
大面改良大丸形

尙大正九、十年度委託試験成績を参考のため再録すれば次の如し。

擔當者 甲、婦負郡鶴坂村 高柳豊次郎(大正九、十年度共)
乙、西礪波郡若林村 吉井與吉(大正九年度)
同 郡廣瀬館村 渡邊友吉(同 十年度)

品名	大正九年度		同十年度		尙九、十年平均收量	
	甲	乙	甲	乙	甲	乙
石丸丸形	六三、三六	六三、三六	三〇、四〇	三〇、四〇	四六、八八	四六、八八
エロウケローブ	六三、三六	六三、三六	三〇、四〇	三〇、四〇	四六、八八	四六、八八
タンパス	六三、三六	六三、三六	三〇、四〇	三〇、四〇	四六、八八	四六、八八
ブラントレーザチ	六三、三六	六三、三六	三〇、四〇	三〇、四〇	四六、八八	四六、八八
フド、ボーゲラール	六三、三六	六三、三六	三〇、四〇	三〇、四〇	四六、八八	四六、八八
石丸丸	六三、三六	六三、三六	三〇、四〇	三〇、四〇	四六、八八	四六、八八
壽仙閣特撰黄玉葱	六三、三六	六三、三六	三〇、四〇	三〇、四〇	四六、八八	四六、八八
石丸平形	六三、三六	六三、三六	三〇、四〇	三〇、四〇	四六、八八	四六、八八
シルバー、スキーン	六三、三六	六三、三六	三〇、四〇	三〇、四〇	四六、八八	四六、八八

(ハ) 甘藷
良品種の普及並に栽培法改善の目的を以て大正九、十年間委託試験を行ひしが左に其の成績を再録

して参考に供す。
擔當者 甲、水見郡水見町 水見農學校(大正九年度)
同 郡窪村 大川政次郎(同 十年度)

乙、射水郡金山村 萩原宗憲(同九、十年度共)

試験區別	大正九年度		同十年度		二ヶ年平均收量	
	甲	乙	甲	乙	甲	乙
標準區(普通)	五八、〇〇〇	四七、五〇〇	六二、二五〇	五二、四〇〇	五九、八二五	四九、九五〇
同上支柱建	七八、二五〇	五九、八二五	六九、七五〇	五九、八二五	六九、七五〇	五九、八二五
折衷章魚植法	五七、〇〇〇	四九、八七五	五七、〇〇〇	四九、八七五	五七、〇〇〇	四九、八七五
大正赤	五七、〇〇〇	四九、八七五	五七、〇〇〇	四九、八七五	五七、〇〇〇	四九、八七五
大正白	六〇、〇〇〇	五二、五〇〇	六〇、〇〇〇	五二、五〇〇	六〇、〇〇〇	五二、五〇〇
黒	六〇、〇〇〇	五二、五〇〇	六〇、〇〇〇	五二、五〇〇	六〇、〇〇〇	五二、五〇〇
薄赤(薄紅)	六〇、〇〇〇	五二、五〇〇	六〇、〇〇〇	五二、五〇〇	六〇、〇〇〇	五二、五〇〇
肥料五割増	七四、二五〇	六三、七五〇	七四、二五〇	六三、七五〇	七四、二五〇	六三、七五〇

甲地は海岸の砂土地、乙地は山畑の礫種なる粘土地なり大正白の如き上記瘠地にて肥料を著しく多量に施用せされば増収を期し難きもの、如し
(ニ) 馬鈴薯
瘠薄輕鬆の墟土地を利用し馬鈴薯の増収法を研究す
擔當者 上新川郡大澤野村 荒瀬正雄

試験區別	反當收量		二ヶ年平均		備考
	九年度	十年度	平均	差引收量	
標準區(中薯)	三、五〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇	〇	畦中一尺株間一尺二寸種用中薯平均八匁のもの
大薯 平作	三、五〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇	〇	種用大薯は平均十三匁
中薯 六寸株間	三、五〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇	〇	下段は地表下三寸上段は一寸とし同一植溝上に雁行
中薯 二段植	三、五〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇	〇	同上最下段は地表下五寸とす、種用小薯は平均五匁
大中小薯三段植	三、五〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇	〇	

同上肥料五割増 一七〇〇〇 四九〇〇〇 八二〇〇〇 一三〇〇〇〇

備考 同地方は瘠薄なるを以て馬鈴薯の如きも他地方に比し段當收量著しく少量にして一般農家は反當二百五十貫匁内外を得るに過ぎざる所なり

丙、花卉

温室花卉、十餘種露地花卉、春秋播約四十餘種を蒐集栽培して一般觀覽に供し一部は切花として販賣又は分譲したり。
尙旁採種を行ひ之を希望者に配付せり。

丁、種苗配付

本年度内に配布したる種苗左の如し。
蔬菜種子 七二種 一八件
花卉種子 五〇 一〇
蔬菜苗 六四 四〇

花卉苗	七五	一五
果樹苗	六四	二二
果樹接穗及插穗	二〇	一〇

戊、園藝品の加工

園藝品の肥培法改良に關する研究の必要なると共に其の生産品利用の加工法研究も亦頗る有要なることなるは論を俟たざる所なり就中漬物の如きは農村副食物中の主眼品なるが故に之が改良法を講ずるは實に魚眉の急務に屬す、仍て當場は此の見地に於て漬物に關し本年度中に試験せし事項次の如し。

- (イ) 越瓜の奈良漬
- (ロ) 大根の奈良漬
- (ハ) 白菜の昆布漬(清酒加用)
- (ニ) 白菜の味淋漬
- (ホ) 大根の淺漬(麴及味)
- (ヘ) 大根の淺漬(淋加用)
- (ト) 甘味澤庵漬
- (チ) 澤庵漬

第三、養畜に關する事項

一、養鶏

副業養鶏獎勵の目的を以て左記の實用鶏を飼育して一般觀覽者の參考に供し併せて養鶏對園藝上の關連(上述空間利用葡萄栽培)につき模範を示せり。
名古屋コーチン
白色レングホーン

横斑アリマス、ロツク

(一) 畜牛
農家の堆肥原料獲得並に副業的搾乳獎勵の目的を以て「ホルスタイン」雜種牝牛を飼育し搾乳の傍ら繁殖を計りつゝあり。

第四、綠肥作物に關する事項

回三日隔(灌水を行ふ)

(一) 紫雲英品種比較試験
當場に於て純系淘汰に依り撰出せるもの三十種及其の原種二種當場に於て試作の結果優良なりと認めたる在來種三種計三十八種に就き比較試験せる成績大要次の如し。

種	品名	開花期	反草收量
早生	早岐	五月十四日	三八・五五
早生	早來	五月十四日	三八・五五
生	當場選出五號	五月十五日	三五・八三

- 耕種梗概
- 一、選種 比重一、〇八乃至一、二三の塩水選を行ふ
- 一、播種期 八月下旬乃至九月上旬
- 一、播種量 (反當)一升五合
- 一、播種法 撒播
- 一、肥料 三月下旬反當過燐酸石灰(二〇%)五貫匁を施用す
- 一、管理 稻刈取後田面に適宜の溝を設け排水に便ならしむ
- 一、灌水 尙乾燥に失する場合に適宜灌水を行ふ
- 一、水 十月中旬又は下旬に三回(一回三日間各)

の如し(表中の前年度成績は水稻大場種を供用せるものなり)

試験區別	收穫時に於ける生育状況		反當收穫量	反當米收穫量	前年度米收穫量
	草丈	分蘖			
無窒素	三、三三〇	二、五七五	二、二二二	一、八八五	一、八八五
反當紫雲英三百貫施用	三、四四〇	二、三三〇	二、七〇〇	二、三〇〇	二、三〇〇
反當紫雲英五百貫施用	三、四四〇	二、三三〇	二、七〇〇	二、三〇〇	二、三〇〇
反當紫雲英七百貫施用	三、四四〇	二、三三〇	二、七〇〇	二、三〇〇	二、三〇〇
反當紫雲英千貫施用	三、七五五	二、五三〇	三、三〇〇	二、七〇〇	二、七〇〇

本成績は前年度試験成績に反し施用量多きに從ひ收量多きを示せるも之は前年に比し天候良好なりし爲と水稻品種を異にせる爲ならん。

八、紫雲英併用肥料試験

紫雲英過剰の施用に依り起る害を防ぐため其の施用を適當なる分量に止め之に配合すべき經濟的窒素肥料を見出さんとすものにして硫酸アンモニア、大豆粕、鯨油、石灰窒素の四種を夫々併用し水稻畿内早生十二號を用ひ試験せる結果鯨油粕區最も收量多く大豆粕、石灰窒素之れに次ぎ硫酸アンモニア區最も劣れり然れども尙試験を重ねざれば明確なるを得ず。

九、紫雲英根部對莖葉部肥効比較試験

紫雲英の地上部と地下部との肥効を比較し併せて莖葉の施用法を知らんとするものにて牛莖葉、半乾莖葉、風乾莖葉を使用し一坪の木框三個を以て一試験區とし水稻は畿内早生二十二號を供用試験せる結果施用法試験は生莖葉區の玄米收量最も多く乾燥するに從ひ減收せり、根部對莖葉部試験成績は次の如し。

試験區別	一歩收量		反當收量	玄米收量
	重さ	容量		
無窒素	三八六	六八九	二、五〇〇	二、〇〇〇
莖葉部	四三六	七六七	二、九〇〇	二、三〇〇
根部	四一〇	八〇六	三、〇〇〇	二、四七〇

(一) 輪作試験

水田裏作として紫雲英を連作すると馬鈴薯、麥等と輪作を行ふ場合は水稻並に紫雲英の生育に如何なる影響を及ぼすかを知らんとするものにして本年は第一年なるを以て一様に紫雲英を作付せり。

(二) 綠肥見本栽培

綠肥作物及豆科植物二十七種を蒐集栽培せり其中生育佳良なるものは、

クロタラリヤ(嘉義種) クロタラリヤ、赤クロバールマンモスレッドクロバール、クリムソンクロバール、小首蒔、大首蒔、黄色秋大豆(福岡縣産)等にしてザアードウキツケン セラデラは生育良好なりしも菌核病の被害多かりき。

(三) 紫雲英播種期對播種量試験(委託試験)

播種期並に播種量を異にする場合紫雲英の生育及收量に及ぼす影響を知らんが爲縣下五個所に於て委託試験をなせる成績次の如し。

播種期	一五合一	一升一五	二升一平	平均
播種量	一五合一	一升一五	二升一平	平均

試験區別	委託試験地	播種量			
		一五合一	一升一五	二升一平	平均
灌	水	一、二七五	七、四〇〇	一、九四〇	一、九四〇
	三回灌水	一、二七五	七、四〇〇	一、九四〇	一、九四〇
	二回灌水	一、二七五	七、四〇〇	一、九四〇	一、九四〇
	一回灌水	一、二七五	七、四〇〇	一、九四〇	一、九四〇
	一回灌水	一、二七五	七、四〇〇	一、九四〇	一、九四〇
水	三回灌水	一、二七五	七、四〇〇	一、九四〇	一、九四〇
	二回灌水	一、二七五	七、四〇〇	一、九四〇	一、九四〇
	一回灌水	一、二七五	七、四〇〇	一、九四〇	一、九四〇
	一回灌水	一、二七五	七、四〇〇	一、九四〇	一、九四〇
	一回灌水	一、二七五	七、四〇〇	一、九四〇	一、九四〇
一ヶ月間灌水	一、二七五	七、四〇〇	一、九四〇	一、九四〇	

播種期	八月				平均
	上旬	中旬	下旬	平均	
前二ヶ年	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇
平均	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇

右成績に依れば播種期後るるに從ひ稍減收を來し播種量は過多なる時は反つて病害多く減收するもの、如し

(三) 灌水回数試験(委託試験)

紫雲英の菌核病豫防の爲適當なる灌水回数並回数を知らんとするものにて縣下五ヶ所に於て委託試験せる成績次の如し。

各試験地の成績は土性及水稻品種の差異により一様ならざりしも灌水區は一般に無灌水區に比し收量多かりしも灌水日數長き時は却て不良なる結果を來すものゝ如し。

(四) 畑地栽培用綠肥作物品種試験(委託試験)
縣下五ヶ所に於て畑作用綠肥作物の品種試験を行ひ以

第五、藥草栽培に關する事項

- 甲、泊芙蘭に關する試験
- 耕種梗概
- 一、栽。植。期。 九月中旬
 - 一、植。付。量。 (反當)七万貳千球
 - 一、植。付。法。 畦幅(溝共)四尺 縱四寸八行植 横三寸 深さ三寸に一球宛植込み壟上に紐殻を覆ふ
 - 一、整。理。 植付一週間前に深く耕起し左記原肥を施して整地をなす
- 一、肥。料。 反當基肥 堆肥二百五十貫、藎灰二十貫 過燐酸石灰七貫、油粕十貫
- 一、管。理。 追肥 人糞尿二百五十貫
- 一、收。穫。 十一月下旬收莖後腋芽の播取りをなしたる後及三月下旬四月中旬の三回に追肥をなし除草は春秋一二回行ふ其他圃地の排水及野鼠驅除に努む
- 一、種。球。掘。取。り。 開花二日目迄に順次採收す
- 一、種。球。掘。取。り。 五月下旬莖葉黃色を呈するを見て掘取りを行ふ

一、栽植適期試験

本試験は泊芙蘭植付の適期を知らんとするものにして種球は平均重量六匁のものを供用せり其の成績左の如し。

試験別	發芽期	種球採取期	草丈	反當一植株平均收莖量	大百株種球數	中百株種球數	小百株種球數	極少種球數	一株平均一植株平均全重量	十、十一、十二ヶ年平均反當收莖量
八月月中旬	10.11.11	5.11.11	1.17	7.9	1.0	2.0	3.0	4.0	11.1	5.8
八月下旬	10.11.11	5.11.11	1.17	7.9	1.0	2.0	3.0	4.0	11.1	5.8
九月上旬	10.11.11	5.11.11	1.17	7.9	1.0	2.0	3.0	4.0	11.1	5.8
九月中旬	10.11.11	5.11.11	1.17	7.9	1.0	2.0	3.0	4.0	11.1	5.8
九月下旬	10.11.11	5.11.11	1.17	7.9	1.0	2.0	3.0	4.0	11.1	5.8
十月上旬	10.11.11	5.11.11	1.17	7.9	1.0	2.0	3.0	4.0	11.1	5.8
十月下旬	10.11.11	5.11.11	1.17	7.9	1.0	2.0	3.0	4.0	11.1	5.8

備考

- 一、本試験は反當七万二千個の割に種球を植付けた
- 二、種球調査は七匁以上を大球七匁以下五匁五分以上を中球五匁五分以下四匁以上を小球四匁以下を極小球とせり

(二) 栽植深度試験
本試験は泊芙蘭植付の深さを異にする時は其の成育收量に如何なる差異を呈するかを知らんとするものにして各種球の深度を定めんが爲め五匁球を小球、七匁五分球を大球として植付けたり成績左の如し。

試験別	發芽期	種球採取期	草丈	反當一植株平均收莖量	大百株種球數	中百株種球數	小百株種球數	極少種球數	一株平均一植株平均全重量	十、十一、十二ヶ年平均反當收莖量
小球一寸	10.11.11	5.11.11	1.17	7.9	1.0	2.0	3.0	4.0	11.1	5.8
小球二寸	10.11.11	5.11.11	1.17	7.9	1.0	2.0	3.0	4.0	11.1	5.8
小球三寸	10.11.11	5.11.11	1.17	7.9	1.0	2.0	3.0	4.0	11.1	5.8
小球四寸	10.11.11	5.11.11	1.17	7.9	1.0	2.0	3.0	4.0	11.1	5.8
小球五寸	10.11.11	5.11.11	1.17	7.9	1.0	2.0	3.0	4.0	11.1	5.8

試験別	反當補付數	草丈	反當一株平均收量	開花數	百株種珠數量	一株平均一株平均二ヶ年反當平均收量
小珠六寸	11.8	1.30	1.15	3.0	11.8	1.15
大珠一吋	10.1	1.20	1.10	3.5	10.1	1.10
大珠二吋	10.1	1.20	1.10	3.5	10.1	1.10
大珠三吋	10.1	1.20	1.10	3.5	10.1	1.10
大珠四吋	10.1	1.20	1.10	3.5	10.1	1.10
大珠五吋	10.1	1.20	1.10	3.5	10.1	1.10
大珠六吋	10.1	1.20	1.10	3.5	10.1	1.10

備考 大珠五寸、六寸植距の蘆は基部の白き部分長く色稍淡くして品質不良なりき

三、栽植距離試験

本試験は泊美蘭の適當なる植付距離を知らんとするものにして種珠は平均重量六匁のものを供用せり成績左の如し。

試験別	反當補付數	草丈	反當一株平均收量	開花數	百株種珠數量	一株平均一株平均二ヶ年反當平均收量
畦巾四尺縱三寸(十行)横三寸	20,000	1.15	1.07	4.0	1.15	1.07
同横四寸	15,000	1.20	1.10	3.5	15,000	1.10
同横五寸	10,000	1.25	1.15	3.0	10,000	1.15
同横六寸	5,000	1.30	1.20	2.5	5,000	1.20
畦巾四尺縱四寸(七行)横四寸	28,000	1.15	1.07	4.0	28,000	1.07
同横五寸	20,000	1.20	1.10	3.5	20,000	1.10
同横六寸	15,000	1.25	1.15	3.0	15,000	1.15
畦巾四尺縱五寸(五行)横六寸	35,000	1.15	1.07	4.0	35,000	1.07

四、種珠比較試験

本試験は種珠の大小により蘆及種珠收量に幾何の差異

あるかを究め以て之が經濟的栽培としての種珠最少限度並に培養の如何を知らんとするものなり成績左の如し。

試験別	發芽期	種珠	草丈	反當一株平均收量	開花數	百株種珠數量	一株平均一株平均全重量
三	10.1	5.1	1.15	1.07	4.0	1.15	1.07
四	10.1	5.1	1.20	1.10	3.5	10,000	1.10
五	10.1	5.1	1.25	1.15	3.0	5,000	1.15
六	10.1	5.1	1.30	1.20	2.5	2,500	1.20
七	10.1	5.1	1.35	1.25	2.0	1,500	1.25
八	10.1	5.1	1.40	1.30	1.5	1,000	1.30
九	10.1	5.1	1.45	1.35	1.0	500	1.35

五、三要素適量試験

本試験は泊美蘭の肥料として三要素の適量を知らんとするものにして肥料は硫酸安母尼亞、過磷酸石灰、硫

酸加里、種珠は一個平均五匁のものを供用せり成績左の如し。

試験別	發芽期	種珠	草丈	反當一株平均收量	開花數	百株種珠數量	一株平均一株平均全重量
無肥料	10.1	5.1	1.15	1.07	4.0	1.15	1.07
無窒素	10.1	5.1	1.20	1.10	3.5	10,000	1.10
窒素一貫	10.1	5.1	1.25	1.15	3.0	5,000	1.15
窒素二貫	10.1	5.1	1.30	1.20	2.5	2,500	1.20
窒素三貫	10.1	5.1	1.35	1.25	2.0	1,500	1.25
窒素四貫	10.1	5.1	1.40	1.30	1.5	1,000	1.30

東瀨波郡庄下村	五七〇	二八〇〇	三、五〇〇	一〇、四〇〇	七、五〇〇
合	一、〇〇七、〇	五、九〇〇	四、二〇〇	一六、八〇〇	一四、八〇〇
平均	五〇三、五	二、九五〇	三、一〇〇	八、四〇〇	七、四〇〇

本試験の經濟關係に關しては跡作地の稻作試験未了に就き本報に記載する運びに至らず。

乙、罌粟に關する試験

- 一、播種期 耕種梗概 十月月上旬 (反當)三合
- 一、播種量 畦幅四尺とし畝上二行に原肥を施したる後條播となし其上に粗殻を覆ふ
- 一、施肥量 反當基肥 堆肥二百五十貫、糞灰十貫、過磷酸石灰七貫、人糞尿五十貫

品種別	莖	葉	花	開花期	花色	莢	果	病害				
三島種丸形	一、八〇	最疎	綠	大	〇、八六	太弱	白	最大	圓柱	淡綠	最多	少
三島種長形	二、〇〇	疎	綠	大	〇、七六	太弱	白	大	圓柱	淡綠	最多	少
三島種變形	二、三〇	並	綠	大	〇、八六	太弱	白	大	圓柱	淡綠	最多	少
三島種變形	二、三〇	並	綠	大	〇、八六	太弱	白	大	圓柱	淡綠	最多	少

- 一、管理 追肥 鯀粕十貫、糞灰十貫、人糞尿二百五十貫 間引は十一月下旬及三月下旬の二回に互りて行ひ最後に株間六寸となす、追肥は十一月下旬より五月上旬迄四回に施し同時に除草中耕をなし五月上旬に至らば倒靡を防ぐ爲土寄を行ふ、五月中旬花蕾抽出すれば一莖二三個を残して他を摘去す
- 一、阿片採收 開花二週間目より着手し隔日に行ふ
- 一、品種比較試驗 本試験は品種の特性を調査し阿片生産量及モルヒネ含有量の優良なる品種を知らんとするものにして其の成績左の如し。

イ、品種特性調査

品種別	莖	葉	花	開花期	花色	莢	果	病害				
三島種赤花	二、〇〇	並	綠	大	一、〇〇	稍細極	赤	大	圓柱	淡綠	稍多	極少
福井種青莖	一、七〇	最密	綠	中	〇、〇六	並強	白	中	圓柱	深綠	中	稍有
福井種黑莖	一、五〇	密	綠	中	〇、〇七	並強	白	中	圓柱	深綠	中	稍有
福井種黑莖有刺	一、五〇	最密	綠	中	〇、〇七	並強	白	中	圓柱	深綠	中	稍有
福井種黑莖有刺	一、五〇	最密	綠	中	〇、〇七	並強	白	中	圓柱	深綠	中	稍有
トルコ紫種	二、二〇	稍密	淡綠	大	一、〇〇	極弱	淡紅	中	扁圓	稍淡綠	最少	稍多

ロ、收量調査

品種別	反當阿片收量	種子量	蒴殼量	莖葉量	九十、十三當阿片收量
三島種丸形	一、七六七	三、八	九、一	一、六七	三、二
三島種長形	一、五五六	三、八	一、一八	一、六〇	三、一
三島種變形	一、五三四	三、八	一、一八	一、六〇	三、一
三島種赤花	一、四四四	三、八	一、一八	一、六〇	三、一
福井種青莖	二、四八一	三、八	一、一八	一、六〇	三、一
福井種黑莖	二、三二七	三、八	一、一八	一、六〇	三、一
福井種黑莖有刺	二、四〇〇	三、八	一、一八	一、六〇	三、一
トルコ紫種	一、五七七	三、八	一、一八	一、六〇	三、一

イ、成育調査

試驗別	開花期	莖長	果梗	蒴殼大小	發育	凍害	病害
九月中旬	五、六、七、八、九、十、十一、十二	〇、七	〇、七	中	中	少	少
九月下旬	五、六、七、八、九、十、十一、十二	〇、七	〇、七	中	中	少	少
十月上旬	五、六、七、八、九、十、十一、十二	〇、七	〇、七	中	中	少	少
十月中旬	五、六、七、八、九、十、十一、十二	〇、七	〇、七	中	中	少	少
十月下旬	五、六、七、八、九、十、十一、十二	〇、七	〇、七	中	中	少	少
十一月上旬	五、六、七、八、九、十、十一、十二	〇、七	〇、七	中	中	少	少
十一月中旬	五、六、七、八、九、十、十一、十二	〇、七	〇、七	中	中	少	少
十一月下旬	五、六、七、八、九、十、十一、十二	〇、七	〇、七	中	中	少	少

ロ、收量調査

試驗別	反當阿片收量	種子量	蒴殼量	莖葉量	九十、十三當阿片收量
九月中旬	三、七三	一、八	六、四	九、一	三、八

本試験は本縣に於ける罌粟播種の適期を知らんとするものにして品種は福井種を使用せり成績左の如し。

二、播種期試験

九月下旬	二四、五	一九、六	五、九	一〇四、九	三、八、二
十月上旬	二四、八	一九、五	六、三	九、六	二、五、八
十月中旬	三三、三	二、六	七、九	一三、〇	二、七、〇
十月下旬	一七、三	三、七	七、四	一〇四、一	一、四、四
十一月上旬	四、二	二、九	三、二	三、五	三、六、六
十一月下旬	四、三	二、五	四、三	一〇、〇	八、一、一

三、阿片採收期試験
本試験は阿片採收の早晩と阿片収量並にモルヒネ含有量の關係を知らんとするものにして品種は福井種を用せり成績左の如し。

七〇

試験別	反當阿片収量	三ヶ年平均反當阿片収量
開花五日目ヨリ採取	四八、一	四〇、〇
開花十日目ヨリ採取	三六、〇	三三、六
開花二十日ヨリ採取	三七、五	三三、〇
開花二十八日ヨリ採取	八七、七	一四、〇

四、阿片採收時刻試験
本試験は阿片採收の時刻により阿片量の多寡、モルヒネ含有量に如何なる影響を及ぼすものなるやを知らんとするものにして品種は福井種なり成績左の如し。

試験別	反當阿片量	二ヶ年平均反當阿片収量
連日午前九時刻傷即時掻汁	三六、一	二七、八
連日正午刻傷即時掻汁	三〇、四	二六、二
連日午後三時刻傷即時掻汁	二六、五	二五、三
連日夕方刻傷翌朝掻汁	四五、二	三五、九

五、株間對花蕾摘去試験
本試験は罌粟の一株に著生せしむべき花蕾數は幾何を以て適當とするやを知らんとするものにして品種は福井種なり其の成績左の如し。

試験別	反當阿片収量	種子量	蒴殼量	莖葉量	二ヶ年平均反當阿片収量
株間四寸一莖一果	三六、四	一七、三	五、四	九九、二	一九、九
株間五寸一莖二果	二五、九	一五、七	六、八	一四、六	二九、一
株間五寸一莖三果	二四、九	三、九	七、九	八三、一	二八、八
株間七寸一莖二果	二五、七	三、五	六、〇	八八、三	二五、七
株間七寸一莖三果	二四、四	二、三	七、二	八二、七	二九、〇
株間七寸一莖不摘果	二六、九	二四、九	七、〇	九九、四	二九、〇

六、罌粟跡作經濟調査試験
本試験は罌粟の畑地栽培上優良なる跡作物を知らんとするものなり成績左の如し。

試験別	播付期	收穫期	反當量	單價	金額
葱	六、二	九、下	五、七	一、把	一〇、五、四〇
甘藷	六、八	九、下	四、三	一、把	九、九、四〇
薑	六、二	九、下	三、七	一、把	一三、四、二〇

七、委託試験
本試験は本縣に於ける水田裏作としての罌粟栽培の適否を調査し併せて經濟關係及稲作との輪栽關係如何を知らむとするものにして試験地は一ヶ所百歩品種は三島種、福井種の二種を使用したり成績左の如し。

試驗場所	一反	阿片量	當	種子量	蒴殼量	莖葉量
------	----	-----	---	-----	-----	-----

中新川郡音杉村	三〇、〇	三六、〇	六〇、〇
婦負郡千里村	一五、〇	一九、〇	三〇、〇
合計	四五、〇	五五、〇	九〇、〇
平均	三三、三	三六、二	四〇、〇

備考
一、右委託試験中婦負郡千里村は冬期凍害を蒙り移植したるもの多き爲め生育不良にして収量に減少を來せり
二、經濟調査は跡作地の稲作試験未了に就き記載すること能はず以上罌粟に關する試験に於て阿片モルヒネ含有量は尙試験中なれば之れが成績を明かにするを得ず。

丙、其他の試験

一、地黄栽植期試験
本試験は本縣に於ける地黄栽植の適期を知らんとするものにして其成績左の如し。

試験別	反當収量	試驗別	反當収量
五月中旬	二六、六	六月中旬	二二、七
五月下旬	二八、八	七月上旬	一九、四
六月上旬	二八、八	七月中旬	六、〇
六月中旬	一九、八		三、〇

(二) 地黄栽培距離試験
 本試験は地黄栽培に於ける適當なる栽培距離を知らんとするものにして其成績左の如し。

試験別	反當栽培數		反當收穫量	
	生	乾	生	乾
畦市四尺 (五行) 横六寸	三〇〇	三〇〇	三六	二五
畦市四尺 (五行) 横八寸	二〇〇	二〇〇	三三	二四
畦市四尺 (四行) 横八寸	一〇〇	一〇〇	二九	二〇
畦市四尺 (三行) 横一尺二寸	八〇	八〇	二二	一五
畦市四尺 (三行) 横一尺四寸	四〇	四〇	一四	一〇

三、地黄栽培法試験

- 耕種標準
- 一、栽培期 六月中旬
 - 二、植付量 (反當) 種根六貫
 - 三、整地 植付前圃地を深く耕起し基肥を施し四尺の畦となす
 - 四、植付法 縦四行、横六寸の距離に長さ二寸の種根を一本宛植込む
 - 五、肥料 反當基肥 堆肥三百貫、油粕十貫、藪灰十貫、過磷酸石灰七貫

本試験は本縣に於ける地黄栽培の適否を驗知し併せて之が經濟的方面の調査をなさんとするものにして中新川郡南加積村に於て面積一畝歩に就て行へり其成績左の如し。

栽培期	生		乾	
	量	常	量	燥
五月上旬	三三	三三	九四	七六
六月中旬	二二	二二	九四	七六

今前收量を平均して之れが收支を計算すれば次の如し

- 收入之部 (反當)
- 一金百貳圓也 乾燥地黄八十五貫代 (十貫に付拾貳圓)
 - 支 出 之 部 (反當)
 - 一金七拾圓七拾五錢也

九圓六拾錢 苗十二貫代 一貫に付八拾錢
 拾圓五拾錢 肥料代

肥料名	數	單	價	金	額
米	三〇	十貫	一、八〇	五、〇〇	一、一五
過燐	二〇	一、五〇	一、五〇	三、〇〇	一、一五
灰	二〇	一、五〇	一、五〇	三、〇〇	一、一五

- 一、管理 追肥 人糞尿三百貫
 七月中旬迄に一回中耕をなし壟上一面に敷藁を行ふ
- 二、收穫 十一月上旬莖葉の枯凋するに至りて收穫

本試験は植方を異にする時は其收量に如何なる差異を呈するやを知らんとするものにして其成績左の如し。

試験別	反當收穫量		均反當乾燥收量
	生	乾	
横植	三三五	一〇〇	九七七
斜植	二七〇	七九	七二九
直立	三九四	一二五	一〇一、五

(四) 地黄跡作經濟調査試験
 本試験は地黄跡作利用としての適當なる蔬菜を知らんとするものにして成績左の如し。

試験別	收穫期	反當收量	單價	金額
高 苣	五月二十日	七〇〇	〇、二五	一七五、〇〇
葱 頭	六月二十日	五元、〇〇	〇、三三	一六四、九

(五) 地黄委託試験

人糞尿	三〇〇	〇、〇二	〇、六〇
-----	-----	------	------

參拾圓

勞賃

畑打起し男三人、整地男四人、植付女二人、追肥男二人、敷藁除草女四人、掘取り男一〇人、調製女六人
 計男一九人 (壹圓貳拾錢) 女一二人 (六拾錢)

參 圓 藪百五拾東代 (一東に付貳錢) 小作料玄米六斗 (一石に付參拾圓)

差引純益金參拾壹圓貳拾五錢
 (六) 川芎栽培期試験
 本試験は本縣に於ける川芎栽培の適期を知らんとするものにして其成績左の如し。

試験別	生	反	常	收	乾	燥	量
十月下旬	三六	三六	七	一三〇	一〇	一〇	一〇
三月下旬	三三	三三	〇	一一二	一〇	一〇	一〇
四月下旬	三一	三一	〇	一一〇	一〇	一〇	一〇

(七) 川芎栽培試験

一金五拾四圓參拾五錢也

肥料名	數量	單價	金額
堆肥	二〇〇	〇.二〇	四〇.〇〇
過磷酸灰	一〇〇	〇.三〇	三〇.〇〇
人糞	一〇〇	一.五〇	一五〇.〇〇
尿	二〇〇	〇.〇二	四〇.〇〇

種根十九貫代 一貫に付五拾錢
肥料代

拾八圓 勞賃
畑打整地男三人、植付女二人、除草女四人、追肥中耕男三人、掘取り男二人、調製乾燥男二人、女八人計男一〇人(壹圓貳拾錢) 女一三人(六拾錢) 小作料 畑一段歩支米六斗(二石に付參拾圓)

八、續草栽培試驗
本試驗は本縣に於ける續草栽培の適期を知らんとす

耕種梗概
一、栽植期 十一月下旬又は三月下旬
一、植付量 (反當) 六千六百球
一、畦幅株間 畦幅四尺に二行植 株間八寸
一、肥料 反當基肥 堆肥二百貫、過磷酸石灰五貫 葉灰十貫、追肥 人糞尿二百貫
一、管理 六月上旬八月中旬の二回に追肥を施し兼て中耕土寄せをなし、七月上旬乾燥を防ぐ爲に壟上に敷葉を行ふ
一、收穫 十一月下旬

本試驗は本縣に於ける川芎栽培の適否及之れが經濟關係を調査せんとするものにして其成績左の如し。

川芎根	生量		乾量	
	反當	當量	反當	當量
三三五	三三五	一一七	三割五分	

經濟調查
收入之部 (反當)
一金百五拾貳圓拾錢也 乾燥川芎百拾七貫代 (十貫に付拾參圓)
支出之部 (反當)

行へるものにして其成績左の如し。

試驗別	生量		乾量	
	反當	當量	反當	當量
十月上旬	三三二	三三二	四六、四	
十月中旬	二二二	二二二	四二、三	
三月下旬	一八〇	一八〇	三一、八	

九、續草摘花試驗
本試驗は續草栽培に於て花梗の摘去が收量に影響するや否やを知らんとするものにして其成績左の如し。

摘花區	生量		乾量	
	反當	當量	反當	當量
不摘花區	二三一〇	二三一〇	四二、三〇〇	
摘花區	一一五、五	一一五、五	二〇、五五〇	

二、續草栽培試驗
耕種梗概
一、栽植期 十一月上旬
一、植付量 (反當) 七千八百株
一、畦幅株間 畦幅三尺五寸とし壟上二行に株間八寸の距離に稚芽一芽宛植込む
一、肥料 反當基肥 堆肥二百五十貫、葉灰十貫、過磷酸石灰五貫、追肥 人糞尿二百貫

一、管理 四月下旬六月下旬の二回に追肥を施すと同時に中耕土寄せをなしたる後壟上に敷葉を行ふ、五月下旬花蕾の抽出と同時に摘去す
一、收穫期 十一月上旬
本試驗は本縣に於ける續草栽培の適否及之れが經濟關係を知らんとするものにして其成績左の如し。

續草根	生量		乾量	
	反當	當量	反當	當量
二七一〇	二七一〇	四四、四	五五、七	

備考 本年は夏期に於て晴天打續き土地乾燥に失したるを以て收穫を來せり

經濟調查
收入之部 (反當)
一金五拾貳圓七拾錢 續草根四十四貫四百代 (十六貫に付拾九圓)
支出之部 (反當)
內譯 苗十貫代 一貫に付壹圓
拾圓 肥料代
八圓五拾錢

肥料名	數	單價	金額
堆肥	二五〇	二〇	五、〇〇〇
過燐肥	一五〇	一、〇〇〇	一、五〇〇
人糞	一〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇
灰	二〇〇	〇、〇二	〇、四〇〇
尿酸			
尿			

拾貳圓

勞賃
畑打起し男三人、植付女一人、除草敷蓋女四人、追肥中耕男二人、掘取り男一人、調製乾燥女三人計男六人(壹圓貳拾錢) 女八人(六拾錢)
參圓
藁百五十束代 一束に付貳錢
拾八圓
小作料畑一反歩玄米六斗(一石に付參拾圓)

差引純益金壹圓貳拾錢

(二) 意苺播種期試驗
本試驗は意苺の播種期が其生育收量に如何なる差異を呈するかを知り以て之が適期を定めんとするものなり

試驗別	草丈	穗丈	分蘗數	反當收量
四月下旬	二二	二二	二二	三、七〇〇
五月上旬	二二	二二	二二	三、七〇〇
五月中旬	二二	二二	二二	三、七〇〇

五月下旬一 三、三 一、八 二〇 二、八〇 〇、九〇

(三) 意苺栽培試驗

- 一、播種期 五月上旬
- 一、播種量 (反當) 二升
- 一、畦幅株間 畦幅二尺 株間一尺に四五粒宛点播す
- 一、肥料 反當基肥 堆肥二百貫、糞灰八貫、過燐酸石灰五貫、追肥 人糞尿二百貫
- 一、管理 間引は六月上旬迄に一二回行ひ最後に二本立となし、追肥は五月下旬より七月上旬迄二回に分施し同時に中耕土寄除草を行ふ
- 一、收穫 十月下旬子實の大部分熟せる頃に刈取り

本試驗は本縣に於ける意苺栽培の適否及經濟關係を調査せんとするものにして其成績左の如し。

反當子實收量	仁	量	精白量
容量目方	容量目方	容量目方	容量目方
三、六	六、〇	一、二〇〇	一、二八〇

經濟調査

收入之部 (反當)

金八拾參圓六錢 精白仁四十四貫三百九代 (十貫に付拾八圓七拾五錢)

支出之部 (反當)

金四拾五圓九拾錢

內譯

壹圓五拾錢 種子三升代 一升到付五拾錢
六圓七拾五錢 肥料代

肥料名	數	單價	金額
堆肥	二〇〇	二〇	四、〇〇〇
過燐肥	一五〇	一、〇〇〇	一、五〇〇
人糞	一〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇
灰	二〇〇	〇、〇二	〇、四〇〇
尿酸			
尿			

拾八圓八拾五錢

勞賃

整地男三人、下種女半人、追肥中耕男三人、間引除草女三人、刈取り女一人、乾燥脫粒男二人、女人、脱穀調製男三人、女一人計男十一人(壹圓參拾錢) 女六人半(七拾錢)

八拾錢

拾八圓 精白料 小作料 畑一反歩玄米六斗 (一石に付參拾圓)

差引純利益金參拾七圓拾六錢

(三) 土荊芥草三要素適量試驗
本試驗は土荊芥草の肥料として三要素の適量を知らんことを目的にして肥料は硫酸アンモニア、過燐酸石灰、硫酸加里を使用せり其の成績左の如し。

試驗別	生	反	量	乾	收	量	燥	量
無窒素	三、八二七							一、二八三
窒素一貫	三、四七二							一、二二五
窒素二貫	四、五八九							一、四六九
窒素三貫	五、九二四							一、七〇二
窒素四貫	七、二〇三							二、一三四
無燐	四、七一〇							九、五七
燐一貫	五、〇六二							一、四〇五
燐二貫	五、一七六							一、五八八
燐三貫	五、一七七							一、六八八
燐四貫	五、八二四							一、四〇八
無加里	五、八〇五							一、九七四
加里一貫	六、六六九							二、〇一六
加里二貫	六、五二八							一、八三三
加里三貫	五、七〇二							一、八七二

(四) 加密兒列下種對移植適期試驗

- 一、播種期 九月中下旬
- 一、播種量 (反當) 苗床三坪に對し一合五勺
- 一、移植期 十一月下旬
- 一、畦幅株間 畦幅四尺二行植 株間八寸
- 一、肥料 反當基肥 堆肥二百五十貫、過磷酸石灰五貫、糞灰十五貫、人糞尿百五十貫
- 一、管理 四月上旬、五月上旬の二回に追肥、中耕 土寄をなし兼て除草を行ふ
- 一、收穫 六月上旬より二、三回に亘り開花せるものより順次採收す

本試驗は本縣に於ける加密兒列の下種及移植の適期を知らむとするものにして成績左の如し。

試驗 別	開花期	反當花收量		反當莖葉量
		花	莖	
下種 九月 中旬末	四月 中旬	三、三〇〇	三、三〇〇	三、三〇〇
下種 九月 中旬	四月 中旬	三、三〇〇	三、三〇〇	三、三〇〇
下種 三月 下旬	四月 中旬	三、三〇〇	三、三〇〇	三、三〇〇

(五) 草見本藥栽培

見本園試作の藥草左の如し。

- 五倍子、接骨木、砂糖楓、鼠李、松藤、梧桐、桃、桑、野薔薇、薔薇、安石榴、辛夷、山椒、土常山、猪牛兒、藜蘆、沿階草、天門冬、黃芩、烏頭、龍膽白及、黃精、麥冬、寶菱答利斯、麥門冬、姬麥門冬、拳參、羊蹄、土當歸、虎杖、紫苑、芍藥、芍藥、香、南柴胡、黃蜀葵、十大功勞、南天、藜蘆、貫眾、何首烏、忍冬、玫瑰、葛、常春藤、蕨、椴子、釣樟、肉桂、月桂樹、綿馬、素馨、紫葳、石胡荽、加密兒列、羅馬加密兒列、茴香、藜木、川骨、苦艾、黃連、水仙、薏苡、大黃、三色堇、續隨子、蓖麻、川芎、當歸、西洋蒲公英、金盞花、白花除虫菊、赤花除虫菊、江南草、鵝頭、朝顏、向日葵、西瓜、車前、蕃茄、薄荷(英國薄荷、米國薄荷、獨逸薄荷、石薄荷、花薄荷) 立麝香草、鳳仙花、曼陀羅華、攝涅瓦、葛

下種 九月 中旬末	下種 九月 中旬	下種 三月 下旬
六、三〇〇	六、三〇〇	六、三〇〇
七、六〇〇	七、六〇〇	七、六〇〇
一、九、三〇〇	一、九、三〇〇	一、九、三〇〇
二、八、三〇〇	二、八、三〇〇	二、八、三〇〇

第六 農具に關する

蒲、香蒲、夏枯草、睡菜、牛膝、甘草、糸瓜、三葉木通、淫羊藿、バイクワイカクサウ、ホザキイカリサウ、マヨラナ、カタクリ、ラヘンデル、サルフィア、ピラウドモウズイクワ、アルテア、アワモリシヨウマ、トリアシシヨウマ、バクチノキ、マンナ

勞力の補足を必要とする作業は元より一にして足らずと雖も農業經營にありては工業其他と異り適當の時期に於て適當の作業を爲さざる可からざるが故に其の一年中の繁閑の差は極めて大なるものにして米麥作の播種又は移植、收穫及調製期は農村に於ける最も多忙なる期節にて勞力を要することも亦大なるを以て是等の作業に對する優良なる農具の普及は就中最も重要なものとする。

本場に於ては夙に茲に致し優良農具の紹介、普及獎勵等に努むると共に年々新式農具二三を購入し調査並研究を行ふと共に當業者の參觀に供するものなり。

事項

(一) 犁比較試驗

本試驗は本縣の農業に適應する犁を判定し農家の參考に資するを目的とするものにして全國に亘り優良と認めらるるもの數種を蒐集し之れが比較試驗を行ひ左記深耕率を選定せり。

野 犁 (磯風號)

右は重量約參貫餘にして深耕に適し普通六寸位は容易に耕起するを得べく耕起の深淺堀の廣狹の調節即ち耕起の深淺に對しては犁轆を上下に、堀の廣狹に對しては左右に轉すべき構造を有し其の結果は確實にして途中に於て狂を生ずることなく堀の反轉も頗る巧妙にて

全面一様に耕起するを得べく、役畜の疲労程度に關しては在來犁に比し何等變る所なく且使用には熟練を要せず素人にも容易に使用するを得たり。尙ほ本犁を畦立用に兼用するに於ては比較的高く畦立するを得べし。

- (二) 農具の審査
- 當業者並農具製造販賣業者の希望に應じ左記農具の能力試験を行ひ其の希望により試験成績証明書を交付せり。
- 廻轉脱穀機 一 五
 - 穀摺機 二 四
 - 犁 三 三

(三) 動力農具

大正十一年度現在當場備付の動力機並に利用農具の主なるもの左の如し。

- Z型石油發動機(三馬力機)
- セミデーゼル石油發動機(二馬力機)
- 元井式螺旋水車
- 犀川式螺旋水車
- 自動穀摺精選機(愛知縣農事試験場考案)

動力掛一人用脱穀機(同)

動力掛二人用脱穀機(同)

ガソリンエンジン直結脱穀機(同)

動力穀摺機(同)

大豆粕削機(尾上式)

(四) 動力利用の範圍

移動式小型石油機關、水車、畜力機の利用により運轉し得る農具の主なる種類を擧ぐれば左の如し。

脱穀機、脱稈機、精米機、肥料の粉碎混合機、製繩機、藁打機、製粉機、溜排水用唧筒等

動力機を利用するに最も適當且有利なるもの左の如し

- 一、多數の小作人を有する大地主
- 二、數町歩の農場を經營する自作者
- 三、組合組織の下に共有使用する場合
- 四、請負作業として各農家を巡廻する場合等
- 五、農具の購入斡旋

當場に於ては當業者の希望により發動機並に利用農具等の購入を斡旋し之れが使用方法等に關し實地指導等其の依頼に應ぜり。

本年度に於て斡旋せる動力機並に利用農具左の如し。

- 1、動力機(インターナショナル石油發動機)
- 一、五馬力機 二 臺
 - 三、〇馬力機 二 臺
- 同 (Z型石油發動機)
- 一、五馬力機 三 臺
 - 三、〇馬力機 一 臺

- 螺旋型水車 一 臺
- 2、脱穀機
- 動力掛二人用脱穀機 一 臺
- 3、穀摺機
- 動力掛穀摺機 八 臺
- 4、人力用廻轉脱穀機 三 臺

第七、農藝化學に關する事項

一、栽培試験

(イ) 縣内各地土壤に對する三要素試験(二万分一)

(イ) 目的 縣内各地代表的土壤につき水稻に對する三要素の天然供給量の多少を査定併せて長期連續栽培に於ける生育状況を窺ひ施肥上の參考資料に供せむとするにあり。

(ロ) 經過及設計 本試験は大正六年度に開始せるものに於て供試土壤は各地水田土壤を用ゐる水稻大場を栽培し肥料は硫酸、過磷酸石灰、硫酸加里を使用し又各

(ハ) 區共炭酸石灰を加用す、なほ連年繼續の豫定なり。成績 大正六年度以來の成績は次表の如し。

區別	區別				
	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年
試驗區	15.2	10.9	11.9	16.7	19.3
太田村	17.4	10.4	9.6	7.7	6.5
小瀬戸村	11.4	7.8	6.5	4.4	6.7
作道村	23.6	22.6	9.7	4.3	7.5
井土口村	16.8	8.1	9.3	5.4	6.9
平均	10.0	9.3	9.3	6.5	9.1

區里加無		區酸磷無				區素窒無							
大正七年	大正六年	平均	大正十年	大正九年	大正八年	大正七年	大正六年	平均	大正十年	大正九年	大正八年	大正七年	大正六年
29.8	33.5	31.7	36.0	32.2	33.7	33.3	33.2	33.0	35.0	34.4	34.8	34.0	36.6
35.1	30.6	32.9	37.0	33.6	34.9	34.7	34.6	34.5	36.4	35.9	36.2	35.0	37.7
33.0	33.0	33.0	35.0	32.0	33.0	33.0	33.0	33.0	35.0	34.0	34.0	34.0	36.8
33.9	33.0	33.5	37.6	33.1	34.7	34.8	34.8	34.7	36.7	36.0	36.4	35.0	37.6
33.4	33.7	33.6	35.0	32.7	33.8	33.8	33.8	33.8	35.7	35.2	35.6	34.8	37.4
33.4	33.7	33.6	35.0	32.7	33.8	33.8	33.8	33.8	35.7	35.2	35.6	34.8	37.4
33.4	33.7	33.6	35.0	32.7	33.8	33.8	33.8	33.8	35.7	35.2	35.6	34.8	37.4
33.4	33.7	33.6	35.0	32.7	33.8	33.8	33.8	33.8	35.7	35.2	35.6	34.8	37.4

土村戸小		土村田太		土場驗試		區別						
無加里區	無磷區	無加里區	無磷區	無加里區	無磷區	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年	大正十一年	平均
100.0	96.9	100.0	96.9	100.0	96.9	67.7	67.7	67.7	67.7	67.7	67.7	67.7
100.0	96.9	100.0	96.9	100.0	96.9	71.6	71.6	71.6	71.6	71.6	71.6	71.6
100.0	96.9	100.0	96.9	100.0	96.9	77.9	77.9	77.9	77.9	77.9	77.9	77.9
100.0	96.9	100.0	96.9	100.0	96.9	81.1	81.1	81.1	81.1	81.1	81.1	81.1
100.0	96.9	100.0	96.9	100.0	96.9	84.3	84.3	84.3	84.3	84.3	84.3	84.3
100.0	96.9	100.0	96.9	100.0	96.9	87.5	87.5	87.5	87.5	87.5	87.5	87.5
100.0	96.9	100.0	96.9	100.0	96.9	90.7	90.7	90.7	90.7	90.7	90.7	90.7
100.0	96.9	100.0	96.9	100.0	96.9	93.9	93.9	93.9	93.9	93.9	93.9	93.9
100.0	96.9	100.0	96.9	100.0	96.9	97.1	97.1	97.1	97.1	97.1	97.1	97.1
100.0	96.9	100.0	96.9	100.0	96.9	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

右成績により三要素區の收量を100として各區の割合を算出すれば左の如し。

土村口井		土村道作			
無加里區	無磷區	無加里區	無磷區	無加里區	無磷區
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(イ) 目的 水稲に對する硫安、魚肥、大豆粕等三種の本年度並に大正九年度本年度平均成績表

區別	草丈		本年	九一年平均	本年	九一年平均	本年	九一年平均
	本年	九一年平均						
硫安少量區	3.5	3.5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
硫安少量區	3.5	3.5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
硫安少量區	3.5	3.5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
硫安少量區	3.5	3.5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
硫安少量區	3.5	3.5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
硫安少量區	3.5	3.5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
硫安少量區	3.5	3.5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
硫安少量區	3.5	3.5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
硫安少量區	3.5	3.5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(三) 紫雲英石灰窒素混施試驗(一万分一)

(イ) 目的 紫雲英と併用せる場合に於ける石灰窒素並に硫安の肥効を比較し施肥上の參考資料に供せんとす

(イ) 目的 水稲大場種に對し加里肥料施肥の適期を知

(ロ) 經過及設計 大正十年度開始水稲大場種を以て試験せるものにして紫雲英は各區共反當五百貫(莖葉のみ)之に硫安及石灰窒素各少量區は窒素反當三貫多量區は六貫多を加へ又磷酸は過磷酸石灰加里は硫酸加里を以て施與す。

(ハ) 成績 本年度成績に依れば硫安並に石灰窒素は紫雲英と併用せらるゝ場合に於て少量區多量區共に硫安を以て優とし石灰窒素を以て劣とす、殊に多量區に於てその著るしきを知る、然れ共前年度の成績はこれと趣を異にせるを以てなほ試験を重ねざれば正確を期難し。

區別	收穫期		粗重量	批重量	莖重量
	草丈	莖數			
紫雲英 石灰窒素 少	三、六九	三、七	八、一	二、〇	二、四
紫雲英 硫安少量	四、一七	二、七	九、一	二、三	九、四
紫雲英 石灰窒素 多	三、五〇	三、〇	七、五	二、二	九、三
紫雲英 硫安多量	三、四	三、三	一、三、九	三、一	一、四、九

(四) 磷酸肥料肥効試験(一万分一)

甲、過磷酸石灰並に蒸製骨粉肥効比較試験

(イ) 目的 本場土壤に對し過磷酸石灰並に蒸製骨粉の肥効を比較せむとするにあり。

(ロ) 經過及設計 大正七年度に開始水稲大場種を用ゐる窒素は硫安加里は硫酸加里を以て施與し骨粉中の窒素は加算せり。

(ハ) 成績 本年度成績に依れば過磷酸石灰區は蒸製骨粉區に優る事著大なりとす。

本年度成績表

區別	收穫期		粗重量	批重量	莖重量
	草丈	莖數			
無磷 過磷酸石灰	三、四四	三、四	四、一	三、九	二、〇、一
蒸製骨粉	三、五五	三、七	五、七	四、一	二、八、一
無磷 石灰	三、四六	三、七	五、一七	四、一	二、八、一
蒸製骨粉	三、四六	三、七	五、一七	四、一	二、八、一

乙、各種形態磷酸肥効比較試験(一万分一)

(イ) 目的 形態を異にせる磷酸質肥料の肥効を比較し以て施肥上の參考資料に供せむとするにあり。

(ロ) 經過及設計 大正九年度開始供試土は多年無肥料を以て栽培せる本場土壤を用ゐる水稲大場種を以て試

驗す、磷酸質肥料は骨粉、磷酸一石灰、磷酸三石灰、磷酸鉄、磷酸アルミナ、米糠等を以てし窒素、磷酸、加里は何れも反當四貫多にして骨粉、米糠中の窒素は加算す。

(ハ) 成績 本年度成績は次表の如くなるも螟虫の被害ありて正確を欠く。

區別	收穫期		粗重量	批重量	莖重量
	草丈	莖數			
骨粉	三、五二	四、三	九、八	一、八	二、〇、一
磷酸一石灰	三、五三	三、〇	六、四	二、二	八、七、八
磷酸三石灰	三、七六	三、九三	八、九、六	一、九	二、〇、四
磷酸鉄	三、五〇	四、〇〇	一〇、一	二、四	二、一、九
磷酸アルミナ	四、四〇	三、五三	七、七、二	二、八	九、一、〇

本年度並に大正十年度本年度平均成績表

區別	收穫期		粗重量	批重量	莖重量
	草丈	莖數			
木灰區	三、七六	三、四四	三、八	三、九三	八、八、六
木灰區	三、五八	三、四九	三、三	三、三	七、九、三
硫酸加里區	三、四八	三、四〇	二、八、〇	三、三、五	七、九、二
本年度	三、五二	三、四四	三、八	三、九三	八、八、六
大正十年度平均	三、五二	三、四四	三、八	三、九三	八、八、六
同十一年平均	三、五二	三、四四	三、八	三、九三	八、八、六

(イ) 目的 水稲大場種に對し加里肥料施肥の適期を知

(ロ) 經過及設計 大正十年度開始供試土は多年無肥料

を以て栽培せる本場土壌を用ゐる水稻大場種を以て試験す、窒素は硫安、磷酸は過磷酸石灰を以て施與す
 (ハ)成績 本年度成績に依れば加里肥料として木灰を施用する場合は全部元肥となるもの並に半量七月上旬追肥となすもの、二者にありては収量に大差なくただ半量六月下旬追肥せるもの稍不良なるもなほ試験を重ぬるに非ざれば正確を期し難しとす。
 本年度成績表

區別	草丈	莖數	穂重量	粒重量	藁重量
木灰七月上旬半量追肥	三、五二	三、一〇	八、三	一、七	九、五
木灰六月下旬半量追肥	三、五五	三、〇〇	七、一	二、二	九、八
木灰全量元肥	三、四四	三、五	八、四	二、一	一〇、五

二、調査

(一)各種有機質肥料の分解程度及其運速
 各種の有機質肥料に就き其分解程度及其運速を比較研究せむとするものにして稍成績の認むべきものありしも正確を期する爲尙調査續行中なるを以て詳細は追て

發表する事とせり。
 調査を行ひし肥料の種類
 骨粉、米糠、鯨粕、鱈粕、鯛粕、胴鯨、蛹粕、大豆粕、紫雲英
 (二)水稻生育各期に於ける三要素吸収量
 及稻生育状況に關する調査
 水稻生育中各期に亘り如何なる程度に三要素を要求し吸収するかを窺ひ施肥との關係に及ぼすとするものにして目下調査進行中に屬す。
 (三)土壤組成分調査
 本縣耕地の大部分をなせる土壤につきこれを各河川流域別とし理學的及化學的方法により分析し目下調査を進めつゝあり。

三、施肥標準調査

(一)原地調査
 本年度原地調査を施行せる町村名は左の如し。
 上新川郡 大澤野村
 中新川郡 濱加積村、上條村、釜ヶ淵村
 下新川郡 大家庄村、前澤村、上原村

婦真郡 倉垣村
 射水郡 下村、小杉町、西條村
 氷見郡 窪村、碁石村、熊無村
 東礪波郡 北股若村、野尻村
 西礪波郡 東太美村、福田村、荒川村
 (以上十九ヶ町村)

(二)鉢試驗

(イ)本年度試驗場に於て鉢試驗を開始せる町村名左の如し。

上新川郡 月岡村
 中新川郡 柿澤村、船橋村
 下新川郡 大布施村、青木村
 婦真郡 寒江村、倉垣村、千里村、黒瀬谷村
 射水郡 横田村
 氷見郡 連川村
 東礪波郡 油田村
 西礪波郡 若林村、松澤村、吉江村
 (以上十五ヶ村)

(ロ)前年より繼續せるもの
 上新川郡 堀川村、太田村
 中新川郡 大森村
 下新川郡 小摺戸村
 射水郡 作道村

東礪波郡 井口村、山田村
 西礪波郡 廣瀬館村
 (以上八ヶ村)

(三)原地栽培試驗

本年度より原地試驗施行村名左の如し。
 上新川郡 月岡村
 中新川郡 柿澤村、船橋村
 下新川郡 大布施村
 射水郡 横田村
 氷見郡 窪村、連川村
 東礪波郡 北股若村、東野尻村、太田村、種田村、青島村、井口村
 西礪波郡 若林村、堀生村、荒川村
 (以上十六ヶ村四十六ヶ所)

(四)分析

本年度に於て土壤の分析終了せる町村名左の如し。

郡町村名	箇所數	採集土壤點數	分析點數	化學分析	理學分析
上新川郡大廣田村	一	一	一	一	一
同 月岡村	一	一	一	一	一
同 山室村	一	一	一	一	一
中新川郡船橋村	一	一	一	一	一
同 宮川村	一	一	一	一	一
同 柿澤村	一	一	一	一	一

下新川郡大布施村	同 若栗村	同 古澤村	同 寒江村	同 射水郡作道村	同 橋下條村	同 横田村	同 黒河村	同 水見郡速川村	同 神代村	同 窪村	同 東郷波郡種田村	同 青島村	同 井口村	同 太田村	同 庄下村	同 西郷波郡若林村
二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三
二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三
二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三
二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三

第八、病虫害に関する事項

甲、病 害
 (一) 稻熱病對水稻品種試験

同 西伍位村	同 是月村	同 堀生村
二〇三	二〇三	二〇三
二〇三	二〇三	二〇三
二〇三	二〇三	二〇三
二〇三	二〇三	二〇三

以上化學分析点数五〇、理學分析点数三一七

四、分 析

本年度施行せる分析点数及成分数は次の如し。

分析品名稱	件 数	成 分 数
肥料(証明提示)	六六	一〇七
同(研究用)	五二	九六
同(場肥標準)	三四	八七
土壤(肥料標準)	三六	六六
水	九	三六
米 穀	一六	八〇
計	五四四	一、〇七五

一、一區歩數 一、二五
 一、一歩株數 四十二株(一株二本植)

一、肥 料。

(反當)窒素五貫、磷酸及加里各三貫とし
 て紫雲英、硫酸アムモニヤ、過磷酸石灰、
 硫酸加里を配合し五月中旬施用す
 其他は當場普通法に依る

本試験は前年に繼續し水稻品種の稻熱病に對する強弱
 を知らんが爲め水稻四十九品種につき穂首稻熱病の發
 生歩合を調査したるに左の如き結果を得たり。

品 種 名	大正十一年 穂首イモチ被害歩合	大正十年
珍好	三、五	三、六
水島	一六、四	二七、八
四谷	七、三	三、六
信州金	三、三	三、六
水野	一三、一	一〇、四
早千	一四、三	一四、三
早前	三、〇	三、四
白石	一、二	三、七
畿内二	一、六	一、〇
畿内六	一〇、八	一、〇
大場	〇、六	四、三
石白	一、一	八、三
九右門	一、八	七、六

大場三七號	同 五號	同 六號	同 九號	同 一〇號	同 二號	同 八號	同 一五號	同 一七號	鍋 割	愛國(在來)	大場見出	大場(在來)	銀坊主(在來)	同 一三號	同 二七號	同 九號	同 一四號	同 一八號	同 一五號	無芒愛國(在來)	
四、〇	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三
三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三
三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三
三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三

試験の方法

- 一、一區面積 十歩(二區制)
- 一、紫雲英品種 岐阜縣產晚生
- 一、播種量及播種月日 (反當二升)八月廿九日播種

於て採集のもの

- 六、紫雲英菌核の生活力に關する試験
自然状態に保ちたる菌核の活力を知らんが爲め前年(十年)春期採集したるもの、當年(十一年)春期採集したるものにつき子器發生の數を調査したるに一年經過のものは子器發生の歩合〇、二二%當年採集のもの八七、〇%成績を得たり。

試験方法

- 七、紫雲英菌核病に對する藥劑撒布試験
菌核病豫防上藥劑の効力を知らんが爲め左記區別により十月六日、同十六日の二回藥劑を撒布し病害の程度を調査したるに各區其發病少く優劣を認めざりしと消石灰、石灰汁撒布區は紫雲英生育最も良好にして收量も多かりき。

試験方法

- 一、一區面積 十歩(二區制)
 - 一、紫雲英品種 岐阜縣產晚生
 - 一、播種量及播種月日 (反當二升)八月廿九日播種
- 試験方法
- 一、消石灰歩當一升の割に撒布
 - 二、水一斗生石灰一貫匁液を歩當一升の割に撒布
 - 三、木灰を歩當一升の割に撒布
 - 四、水一斗木灰一貫匁液を歩當二升の割に撒布
 - 五、酸曹液比重〇、四度液を歩當二升の割に撒布
 - 六、三斗式石灰ボルドー液を歩當二升の割に撒布
 - 七、無豫防
 - 八、紫雲英菌核病に對する灌水試験
灌水時期と菌核病被害の程度を知らんが爲め左記區別により灌水したるものにつき病害發生及紫雲英生育状況を調査したるに十月中旬より灌水したる區發病少く紫雲英の收量最も多かりき。
- 試験方法
- 一、一區面積 八歩(二區制)
 - 一、紫雲英品種 岐阜縣產晚生
 - 一、播種量播種期 (反當二升)八月廿九日播種

試験區別

- 一、十月中旬より三日間宛三日隔てに三回灌水 (十月十四日より始め)
- 二、十月下旬より 同 (十月廿三日より始め)
- 三、十一月月上旬より 同 (十一月四日より始め)
- 四、十一月月中旬より 同 (十一月十三日より始め)
- 五、十二月中旬二回灌水
- 六、標準(無灌水)

九、紫雲英種子塩水選効果試験

菌核病豫防上種子の塩水選の効果を知らんが爲め新土壌に左記區別により菌核を播下し被害程度を比較せし其の成績未だ判明ならず。

試験方法

- 一、一區面積 十歩(二區制)
- 一、紫雲英品種 岐阜縣產晚生
- 一、播種量播種月日 (反當二升)八月廿五日播種
- 一、種子一升中に菌核百粒混じたるもの
- 二、同 五百粒を混じたるもの
- 三、同 千粒を混じたるもの

- 四、同 五千粒を混じたるもの
 - 五、標準(菌核を混じたるもの)
- 乙、害虫
- 一、二化螟虫發蛾時期調査
當場附近に於る二化螟虫發蛾時期を知らんが爲め豫察燈を点火し飛來し來りたる螟蛾につき調査せる成績左の如し。

第一化期	發蛾初期	最盛期	終期
五月十四日	五月二十九日	六月二十九日	
七月二十五日	七月二十九日	八月二十五日	

- 二、二化螟虫加害時期調査
螟虫驅除の適期を知らんが爲め第一化期、二化期を通じて五日毎に被害莖を切り取り莖内虫數を調査せしに被害莖中の虫數第一化期間は平均一莖一頭なりしも第二化期八月二十頃は一莖平均一〇、五頭、八月廿五日頃は一二、八九頭、八月三十日頃二、七〇頭にして九月五日頃に至れば一、一〇に減少せるを見たり。
- 三、藪垣搔拂調査

積葉中に越冬する二化螟虫の蛹化期に際し、塚の周囲を熊手にて搔拂ひ驅除したる螟虫数を調査せんものにして約三五〇束積の藁束を四月下旬より五月下旬まで十八回に亘り驅除したる螟虫數千八百四十一頭に達したる。

(四) 螟虫第二化期驅除効果調査

螟虫第二化期被害莖切取の効果を知らんとするものにして其成績によれば切取區は何れも標準區に比し増収を見たり即ち左表の如し。

切取區	反當玄米収量	
	十一年	十年
八月二十日一回切取區	二、三三六	二、〇〇八
八月二十日、二十八日二回切取區	二、三六三	二、〇〇一
八月二十日、二十八日三回切取區	二、三六三	二、〇〇八
八月廿八日、九月五日二回切取區	二、三六六	二、〇三三
標準區(切取を行はず)	二、三六六	一、九三三

備考 品種無世愛國を供用せり

(五) 螟虫卵寄生蜂に関する調査
二化螟虫卵塊寄生蜂の寄生歩合を調査せるものにして

成績左の如し。

卵塊採集期	寄生蜂寄生歩合(卵粒)			
	大正十一年	大正十年	大正九年	大正八年
六月中旬	四三、三三%	三三、三三%	二四、六六%	一五、三三%
六月下旬	四三、三三%	七六、三三%	二九、六六%	三三、三三%

(六) 稻開花期に於ける葉鞘變色莖摘採影響調査

(イ) 稻株動搖對被害莖摘採の比較調査
摘採區は被害莖を切取り動搖區は單に稻を動搖し、標準區と對照したるものにして結果によれば摘採區は之を行はざる區に比し反當二斗一升九合を増収し動搖區は之れを行はざる區に比して反當三斗六升の減収を來せり。

(ロ) 稻動搖回數對收量調査

稻を動搖すること三、五、六回に區別し其の影響を調査せしに三回動搖區にありては標準に比し反當一升二合、五回動搖區は反當一斗二升四合、六回動搖區は一斗一升八合の減収を來せり。

(七) 野鼠窒扶斯菌の配付
本年培養の上有價(培養費)を以て配付したる野鼠

窒扶斯菌は二千三百十町歩分にして内譯左の如し。

中新川郡舟橋村農會	六〇、〇
婦負郡草島村農會	三〇〇、〇
射水郡作道村農會	五〇、〇
東礪波郡般若野村農會	三一五、〇
同 郡北般若村農會	三七五、〇
同 郡大鋸屋村農會	一一〇、〇

第九、練習

本年度に養成せる練習生は次の如し。
第一種 (町村技術員たるべき義務ある者) 四名

生

同 郡太田村農會	三〇〇、〇
同 郡出町農會	四四〇、〇
同 郡北野村農會	一五〇、〇
西礪波郡松澤村農會	一四〇、〇
富山市農會	六〇、〇
計	二、三二〇、〇

第二種 二名

第十、成績普及並に農事指導

- (一) 印刷物 二五、〇〇〇部
- (2) 農事時報 一、〇〇〇部
- (3) 稻乾燥試驗成績

- (3) 業務報告 五〇〇部
- (4) 蔬菜栽培手引表 一、五〇〇部
- (5) 肥料分析表 一、〇〇〇部

經	(6) 藥	(5) 花	(4) 果	(3) 蔬	(2) 麥	(1) 稻	發	收
內	(四) 藥	草	卉	菜	種	種	送	受
常	草	種	種	種	子(原種)	子(原種)	件	件
譯	種	苗	苗	苗	配	配	數	數
費	費	費	費	費	付	付	書	書
	四九、八八〇、〇〇〇	二二五種	八四種	二二二種	一、八八〇	一、三、一一一	八七三	一、九九一

試驗事務打合	三
肥料試驗觀察	三
農事觀察	一
其他	一
計	六

俸給	一〇、〇九八、〇〇〇
雜費	九、八二八、〇〇〇
場給	一、六九七、〇〇〇
修繕費	二二二、〇〇〇
米麥原種圃費	四、一五五、〇〇〇
綠肥改良増殖試驗費	四、六四五、〇〇〇
施肥標準、調査費	六、四〇二、〇〇〇
藥草園費	二、八三三、〇〇〇

農事講話	三
實地指導	一
計	四

第十一、其他の事項

出張事項	回数	日数
農事講話	六	六五
實地指導	一	一三
計	七	七八

- (1) 文書、質疑應答 二〇〇件
- (2) 家禽に關する件 一三〇件
- (3) 作物栽培に關する件 八〇件
- (4) 肥料に關する件 一二五件
- (5) 農具に關する件 九七件
- (6) 藥草に關する件 四三件

實地指導	三
農事調查	一
計	四

項

- (1) 團體參觀人員 一、三二三名
- (2) 生徒參觀人員 一、八〇七名
- (3) 其他 七七三名
- 計 三、八九三名

農事調查	五二
諸會合列席	二四
試驗事務打合	四二
肥料試驗觀察	一四
農事觀察	三〇
其他	七四
計	三六三

終

